

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

多 米

豊橋校区史

13

Tame







校区のあゆみ 多 米

多米小学校の4年生に「未来の多米」を描いてもらった。どの子どもみな大きな夢を持っていて、うれしく思う。多米の明るい未来はこの子たちが主役となって展開されていく。

今回、「校区のあゆみ」をまとめるにあたって、思い至ったことがある。

これは運動会のリレーと同じではないか。

前の走者からバトンを受け継いで、次にしっかりと渡していく。みんなの気持ちが一つになって、次から次へと大事に渡していく。

多米のあゆみも、そのまま、ずっと昔から続いてきた大きなリレーにほかならない。

この「校区のあゆみ」は多米の子たちにバトンの代わりに手渡していきたいと思う。



多米小 白井弘平君の作品

自然と共に生きる



山わらう赤岩山



ホテルの宿 岩崎水車と桜



大賀蓮（別名2000年蓮）ビオトープ



朝倉川遊歩道の桜



多米不動滝

羽ばたきとんてきけ今



多米校区体育祭



東陽中ソーラン踊り



多米小学校運動会



平成18年度 多米小学校1年生

希望高く文化の創造



多米春日神社イヌマキ（市指定天然記念物）



赤岩寺 赤門



春日神社大祭



安全・安心の町づくり（多米自主防災会）

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと 생각합니다。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
多米校区総代会長

萩 本 和 夫

刻々と流れる時は偉大です。

豊橋市制100周年、この間、時の流れは激流そのものでした。そして今は、平和と繁栄の中、ひとつの転換点にあるように思います。

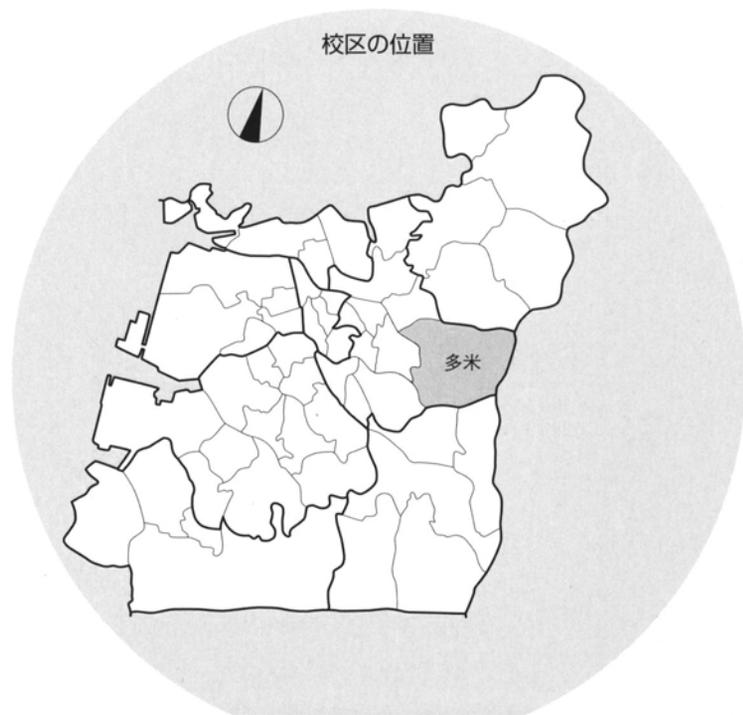
この校区史編集の過程で時の流れと人の営みの多くにふれ、いろいろ考えさせられました。先人の苦労と努力の数々は、すべてこの地域の豊かな生活の実現に向かうものでありました。しかし、その事実の多くは歴史の中に風化されつつあります。

私たちは時に立ちどまり反すうすることの大切さを思います。ぜひ、その活動が始動し拡大することを心から期待します。

さて、これから100年、何を標ぼうしたらよいのでしょうか。つまる所、人の英知と共働を軸とした決断と実行力が何よりも大切であるように思うのです。校区の皆さんが大きな夢と希望を持ち、明日に向かって力強く進むことを望みたいと思います。

おわりに、この100周年に関わりました多くの方々に深じんの敬意と感謝を申し上げまして、末筆といたします。

第1章 自然と環境	2 産業の変遷	32
1 校区の位置	(1) 農業	32
(1) 多米の位置	(2) 商工業	34
(2) 多米の地形	3 心をつなぐ校区の活動	36
2 周辺の環境	第3章 教育と文化	
(1) 多米の気候	1 学校教育	42
(2) 弓張山系の植生	(1) 小学校教育	42
(3) 多米の野鳥	(2) 中学校教育	43
(4) 自然歩道	(3) 幼児教育	43
(5) 葦毛湿原	(4) その他	44
(6) 530運動発祥の地	2 社会教育	44
3 校区の変遷	3 史跡・文化財	45
(1) 残された地名	4 多米の巨木名木	46
(2) 合併や分村	5 神社・寺院	47
第2章 歴史と生活	6 人物と伝説	48
1 校区の歴史	7 風俗と信仰	49
(1) 原始時代	年表	50
(2) 古代から中世	編集後記	52
(3) 江戸時代		
(4) 明治になって		
(5) 大正から昭和へ		
(6) 悲惨な戦争		
(7) 戦後の様子		
(8) 新たな出発		



第1章 自然と環境

1 校区の位置

(1) 多米の位置

多米校区は豊橋市の東部に位置し、東方に愛知県と静岡県の間境をなす弓張山系が南北に連なっている。

校区の最高地点はこの弓張山系の尾根の上であり、標高406.3m、古老がカクザと呼んでいた山で麓からもよく見える。

この弓張山系にさえぎられて、東へ通じる道はなく、多米は行き止まりの地であった。

市街地の方から多米を訪れた人は、帰りにはまた同じ道をもどることになった。

多米校区から市街地に出るには、2つの道しかなかった。多米からは、蟬川を通して東田に出る道、岩崎には鞍掛神社から岩田へ出て市街地に通じる道があった。

小学生や農家など地元で暮らす人をのぞいて、村の人たちが用事を足すには、西へと向かうしか方法がなかった。

通学や通勤をする人たちにとっては、どんなに暑くても、また寒くても、1日のはじまりは西へと向かうことであった。



弓張山系の山並み

昔、多米峠を越えて静岡県側に通じる山道もあったが、車の通れない多米峠をはさんで暮らす人たちの間には交流がなかった。

自然現象である日の出や月の出も、多米の人が見ているのは、山の上に昇ってきた小さな太陽や月である。以前に静岡県側で見た満月の巨大さに驚いたことがある。

交流がなければ、峠の西東では、そこに住む人々の考え方に違いがあるかもしれない。

昭和40年、多米峠有料道路のトンネル工事が始まり、静岡県側への東の道が開かれた。

「トンネルの向こうに何があるの?」と聞く1年生の素朴な質問に答えて、多米小学校の先生たちは、峠の東側にある湖西市知波田小学校との遠足交流会を企画した。

昭和40年10月27日、標高265mの多米峠の上で、多米小1・2年生41名と知波田小1年生56名が握手をかわして姉妹校になった。

多米の柿と知波田のみかんを交換して、なかよく弁当を食べて、峠から浜名湖や豊橋の市街を見下ろして、楽しい1日を過ごした。

トンネルの貫通は両地区を車で20分の距離に縮めたが、県境の標識をまたいではいやぐ児童たちの心の距離は無くなっていった。

多米峠を通る道は主要地方道豊橋大知波線として整備され、多米トンネルの開通により西遠地方とを結ぶ動脈となった。

校区の西部には東三河環状線が多米西町の山麓まで開通している。トンネルの開削も決定しているので豊橋北部への幹線となり、ここ多米の地は2つの幹線道路が交差する交通の要所となるであろう。

(2) 多米の地形

多米校区は、北、東、南の三方を弓張山系に囲まれ、西に開けた地形である。

弓張山系の尾根は標高300m前後であるが東部の滝ノ谷から南の岩崎や葦毛へと続く尾根は高く、神石山の標高は324mである。滝ノ谷の山地はすべて国有林となっている。

北部の尾根は西にいくほど低くなり、赤岩山の標高が309mであるのに、キジ山はその半分以下の135mである。赤岩山は赤岩寺領であり、その西に続く野中や蟬川の山地には私有地が多い。

弓張山系の山麓の丘陵地は畑地や果樹園として利用され、中央部の平地は古くから水田として開発されてきた。

校区の中央部を流れる朝倉川は、東部の滝ノ谷を水源として不動滝をつくり、滝川となり、蛇行しながら西へとゆるやかに流れていたが、ひとたび集中豪雨ともなれば、山から一気に流れ込む大水で朝倉川が氾濫して、過去に洪水による被害が何回もあった。

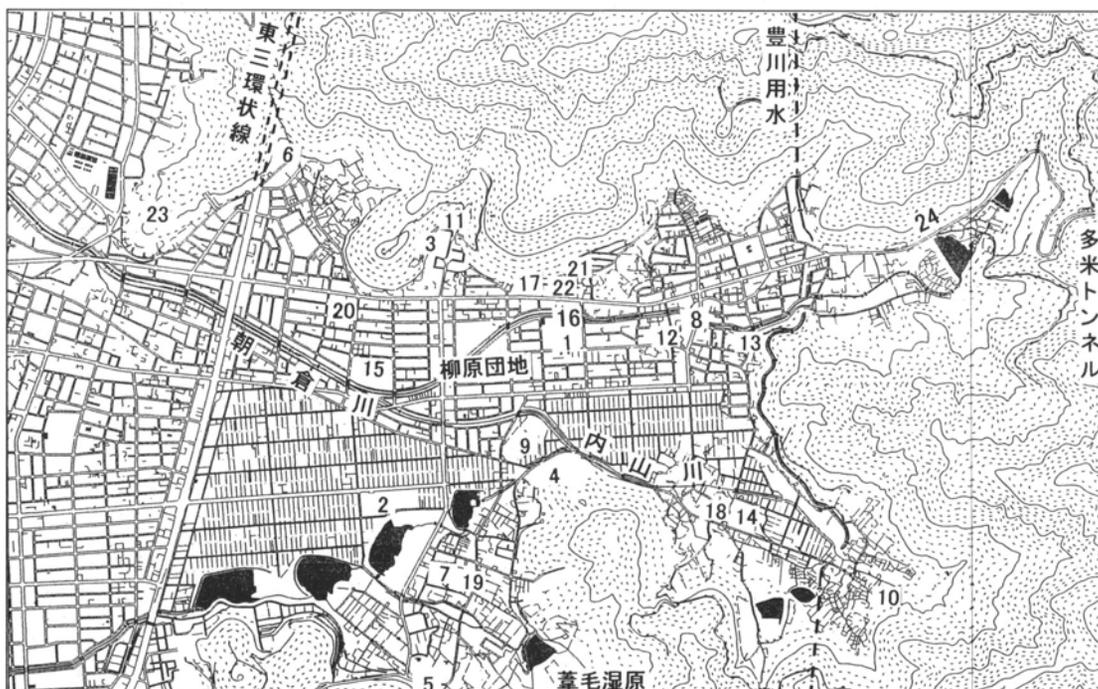
その後、国の一級河川指定による河川改修や区画整理事業の完了とともに、朝倉川の流路も直線状となって、大きく変わった。

岩崎の内山川は山中川に流れる柳生川水系であったが、流域変更により朝倉川水系となり多米公園の南で朝倉川に流れ込んでいる。

区画整理により市街化区域となった多米は地形も土地利用も大きく変容し、住宅や商店・病院などができ新しい町になった。

多米校区の主要施設

1 多米小学校	7 岩崎学園	13 歓喜院	19 葦毛公民館
2 東陽中学校	8 春日神社	14 龍岩院	20 多米交番
3 東部保育園	9 鞍掛神社	15 東陽地区市民館	21 民俗資料収蔵室
4 ゆめの子幼稚園	10 日吉神社	16 多米校区市民館	22 J A 豊橋多米支店
5 仔羊幼稚園	11 赤岩寺	17 多米公民館	23 多米配水場
6 高山学園	12 宝珠寺	18 岩崎公民館	24 名大地殻変動観測所



2 周辺の環境

(1) 多米の気候

豊橋の気象としては、年平均気温16.5℃、年平均降水量1,550mmとなっているが、多米についても同じくらいとみてよかろう。

多米の気象で特筆されるのは、近年になって風当たりが強くなったことである。

昔はどここの家も、森や竹やぶに囲まれた屋敷森の中に家屋が建てられており、これらの屋敷森にさえぎられ風の勢いも弱められた。

区画整理の結果、屋敷森はほとんどなくなり、多米の中で森が見られるのは春日神社や鞍掛神社の境内など数少なくなった。

「三河の空っ風」は有名であるが、今の多米には風をさえぎるものがなく、一方でまっすぐに東西に延びる県道や朝倉川の上を風が勢いよく吹いている。

(2) 弓張山系の植生

多米の後背地としてそびえる弓張山系の四季の移ろいはみごとな景観である。

俳句では、山笑う・山滴る・山粧う・山眠るの季語で四季の山を表現している。弓張山系を見ていると、その通りだと思う。

この彩りのあざやかさはコナラ群落によるものであり、コナラ、シイ、カシ、ヒサカキなどの自然林が広く分布している。

多米の国有林は、マツ、スギ、ヒノキの造林地としてさかんに植樹された。

特にマツはやせ山には赤松、肥えた山には黒松が多く植えられ、一面がマツにおおわれた山地となっていた。

その後、昭和30年代から40年代にかけてマツクイムシが大発生し、その食害で多米の山のマツはほとんど枯れてしまった。

その後には雑木が生えて、多米の山は今、自然林となったところが多く、四季おりおり

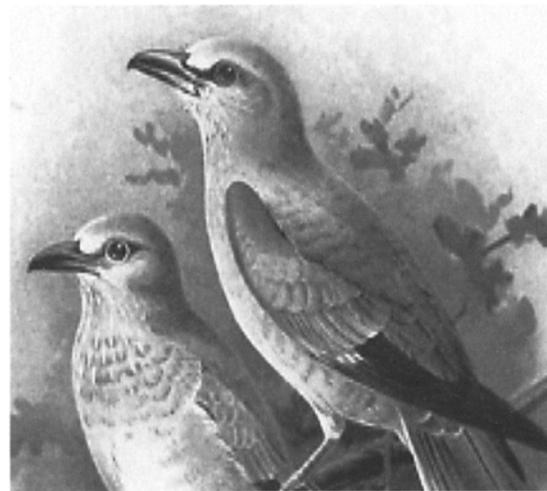
の風情を楽しませてくれている。

(3) 多米の野鳥

岩崎の水田で野鳥のカウントをしている人がいた。何を観察しているのかたずねたら、ケリだという。コサギもいるシアオサギもいる。オオタカやノスリも飛んでいて、多米の山には野鳥がとても多いと教えてくれた。

春、ウグイスが鳴く。その鳴き声によく似て「キョキョ、キョキョキョキョ」と鳴く鳥がいる。毎年5月にやってくるホトトギスだ。ウグイスの巣に託卵するというから季節が重なるのであろう。

コゲラが春日神社の森で「コッコッコ」とドラミングしている。「ヒーツキホシ」と鳴くサンコウチョウも姿は見えないが確かにいる。アオバズクもいて、夜中に「ホーホー」と白山の森で鳴いている。



ホトトギス

多米は野鳥の宝庫である。

東陽中学校体育館の屋根に集まるハシブトガラスの大群ばかりに目を奪われないで、野山へ行って、じっくりと耳を傾けてみよう。

そこには、ホオジロ、メジロ、キビタキ、ジョウビタキ、ヤマガラ、クロツグミ、マヒワ、キジ、シジュウカラ、コガモ、カワセミなどが、みんなを待っている。

(4) 自然歩道

多米校区は自然の豊かな地で、石巻山多米県立自然公園に指定されている。風致地区として岩崎緑地や赤岩緑地が指定されている。

県境として南北に走る弓張山系の尾根つたいに市民の手により開かれた豊橋自然歩道があり、校区には多米自然歩道、普門寺・神石山自然歩道、葦毛湿原岩崎自然歩道、赤岩・赤岩寺自然歩道の4支線が開かれている。

① 多米自然歩道

多米峠直下のトンネル西入口より多米峠にいたる700mは昔の多米峠越えの山道であり、最も短いコースである。

植林されたヒノキ林を少し登ると、広くなだらかな多米峠に出る。眼下に浜名湖を、晴天時は遠く富士山が見えることがある。

② 普門寺・神石山自然歩道

手洗から雲谷町の普門寺まで、普門寺峠・神石山を越える2ルートがある。手洗から普門寺峠への山道は頼朝の通った鎌倉街道でもある。

峠を下ると普門寺の本堂に着く。観音堂前に見事な天然記念物の大杉がある。

③ 葦毛湿原・岩崎自然歩道

岩崎のバス停から葦毛湿原を通り、一息峠を経て尾根上のNHK中継所までの自然歩道である。

中継所からは三河湾から太平洋までが一望でき、弓張山系南端で屈指の展望地として、絶好のハイキングコースである。

④ 赤岩・赤岩寺自然歩道

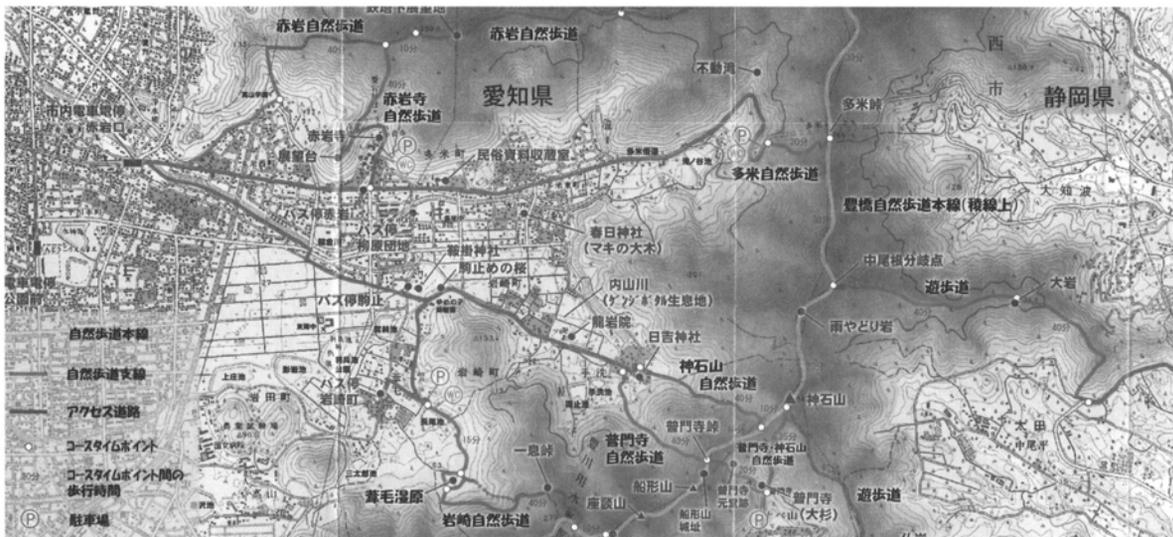
校区の北を西に向かって延びる尾根に平成15年に開かれた自然歩道で、最も新しいコースである。

豊橋自然歩道の本線から北山・花柄山・赤岩山・乗小路峠を経て高山学園まで続いている。赤岩寺境内からの登り口もある。

この4つの自然歩道を地図上で確かめると、多米校区をぐるりと取り巻いていて、自分たちの住んでいる街をどこからでも眺めることができる。

三方を山で囲まれた多米の地ならではの自然からの贈り物である。

これらの自然歩道の開通に尽力された豊橋自然歩道推進協議会の方々に感謝するとともに、校区民そろってこの鳥瞰^{ちようかん}を楽しみたい。



多米を取り巻く自然歩道

(5) 葦毛湿原

岩崎町にある葦毛湿原は、『東海の尾瀬』とも呼ばれ全国的にも有名であるが、この湿原の存在を世に知らしめたのは恒川敏雄・野澤東三郎両氏の尽力によるものである。

昭和40年6月、植物学者の恒川氏の案内で野澤氏は初めて葦毛湿原に入った。

トキソウ、カキラン、ノハナショウブの可憐な花。ハッチョウトンボの蛍光塗料のような紅。さわやかなせせらぎ。バス道路から少し入っただけなのにこの騒音のなさ。傾斜面の湿原。原生林にはカザグルマ、ハンカイソウが華やかに咲き、美しい野鳥の音が…。

新幹線からわずか5kmしか離れていない。

こんなところは日本唯一ではなかろうか。

どうしても保護して、愛好者に見てもらいたい。そのためには土地を心ない人に買われない先に入手したい。

自然の美しさに感激した野澤氏は、湿原の一部を環境保護のために購入した。

昭和42年、豊橋山岳会の夏目久夫氏らの協力で枕木遊歩道の布設がはじまり、葦毛湿原は市民の前に姿をあらわした。



葦毛湿原の木道

(6) 530運動発祥の地

昭和44年には豊橋自然歩道推進協議会が発足し、葦毛湿原にとどまらず、弓張山系一帯の自然に親しむ環境づくりが始まった。

昭和47年10月、校内話し方大会で豊岡中学2年生の三浦裕見子さんは「葦毛は語る」と題して、葦毛湿原の保護を呼びかけた。これが生徒会活動への契機となり、昭和48年、葦毛湿原岩崎自然歩道パトロール隊が結成され毎週土曜日午後1時に湿原保護活動を開始した。

「葦毛の自然」「葦毛の野鳥」などのガイドブックも発行し、豊岡中学校は昭和55年に全国野鳥保護のつどいで環境庁長官賞受賞。昭和56年には葦毛湿原保護活動で文部大臣奨励賞の栄誉に輝いた。

一方で、中学生たちの保護活動も転機を迎えた。湿原にゴミかごを整備し、みんなでゴミを拾って入れる。それがいっぱいになって外にこぼれている、一人ひとりのゴミは少ないが集めてみれば大変な量になる。

『自分のゴミは自分で持ち帰りましょう』この中学生たちの呼びかけで、豊橋の町に、ゴミゼロ運動が始まった。5月30日を活動の一つの目安として530（ゴミゼロ）運動と呼ぶことになった。

昭和50年（1975）に始まった530運動は豊橋市を発祥の地として、その後全国的に普及して、自然環境美化に成果を上げてきた。

『世界遺産登録に失敗した富士山』というニュースが話題になったが、その原因の一つに「ゴミがいっぱい」と聞いてショックを受けた。人が捨てればゴミ、捨てなければゴミゼロ…、530運動の内容がいつのまにか変容して、落ちていた他人の捨てたゴミを拾う日になったのは情けないことだと思う。

「自分のゴミは自分で持ち帰りましょう」もう一度、あの中学生たちの言葉を思い出して、530運動の原点にもどりたい。

3 校区の変遷

(1) 残された地名

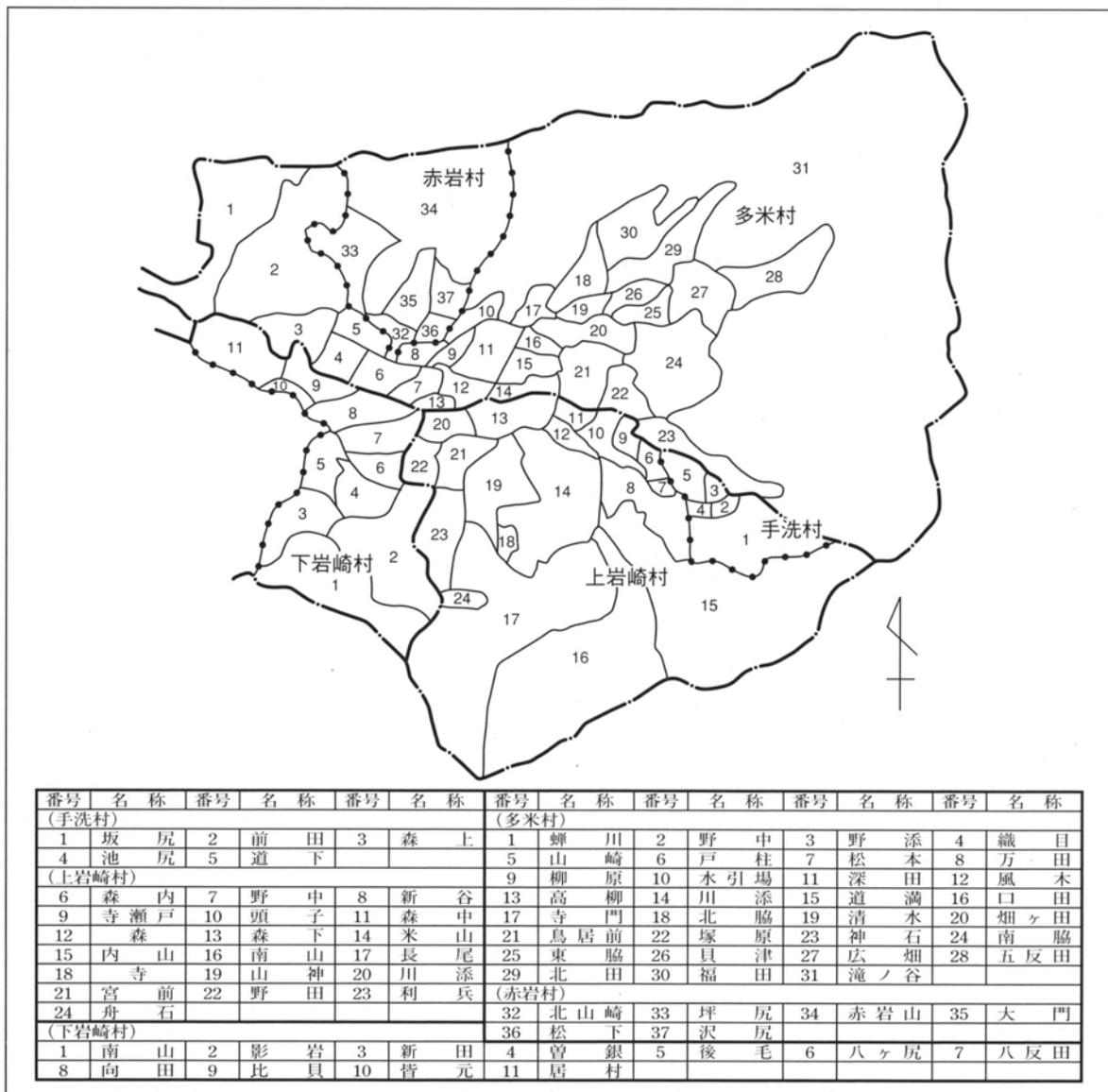
区画整理の完工により、多米の町名は全く改まったが、公園や橋の名前に旧字名が意識的につけられて由緒ある地名が残された。

合併や区画整理で地名が消え失せていくことの多い中で、こうした配慮をしてくれた当事者の見識に深く敬意を表したい。

下図は、明治初年の多米村、赤岩村、岩崎村（上・下）、手洗村の字界図面である。旧字名のついた公園や橋を巡って昔をしのぶよ

すがしてほしい。

- 公園 蝉川第二公園、居村公園、ヒカイ公園
野中第二公園、野中公園、織目公園、
多米公園、向田公園、高柳公園、
川添公園、道満公園、鳥居前公園、
南脇公園、北田公園、広畑公園、
- 橋梁 多米橋、居村橋、野添橋、比貝橋、
松本橋、風木橋、深田橋、寺門橋、
鳥居前橋、上寺門橋、上神石橋、森橋、
内山一号橋、内山二号橋、
- 団地 柳原団地



(2) 合併や分村

平成18年度豊橋市総代会名簿により、校区12町内の世帯数をみると右表の通りである。

明治の初め、多米の戸数は約150戸、岩崎約50戸といわれ小さな村であった。それが今、3,000戸を超す大きな校区になった。

豊橋市内51校区の中で上から8番目の世帯数の大きな校区である。

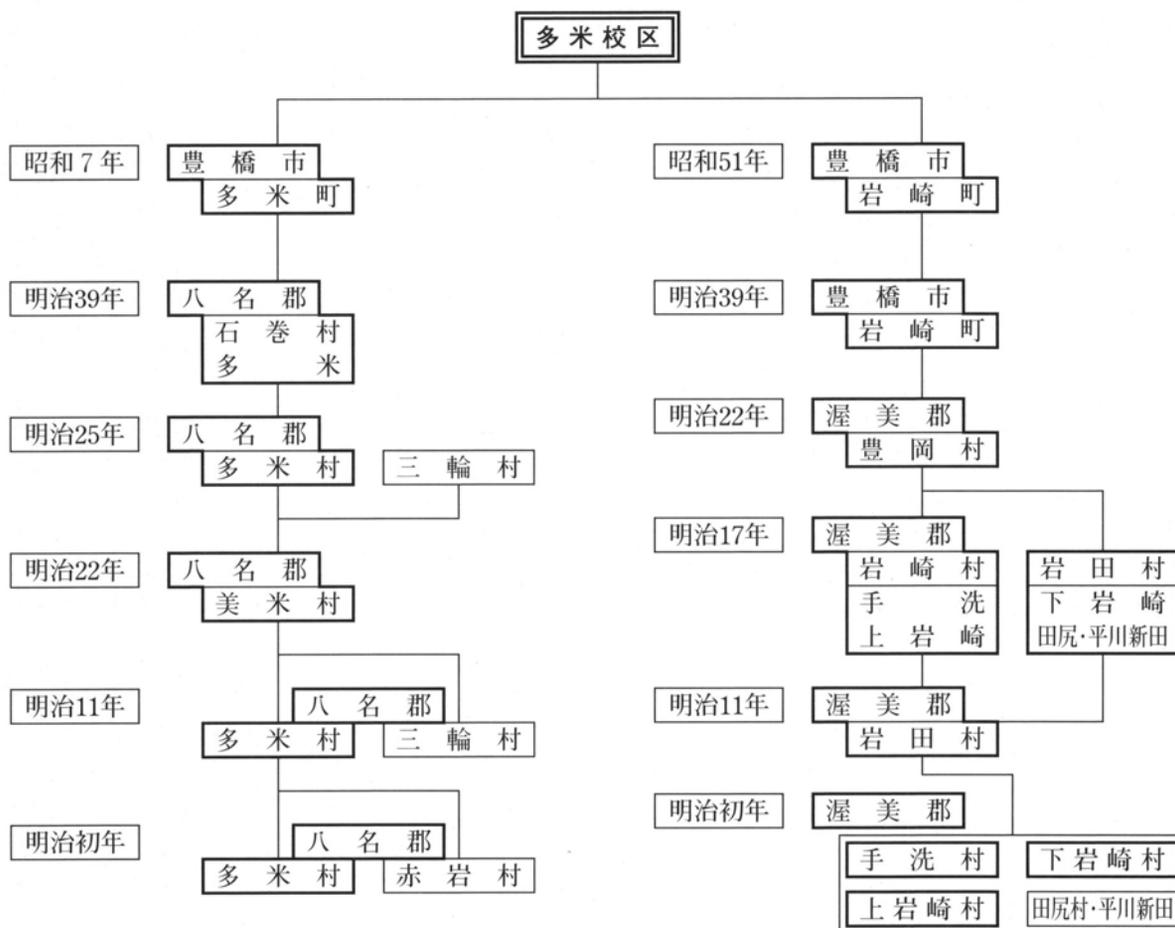
ここに至るまでには、多米の土地区画整理による住宅の増加（市営住宅の建設）、岩崎町との合併などがあげられる。

この間、多米校区においては下図のように合併や分村を繰り返した。

平成18年8月1日、豊橋市は市制100周年を迎えたが、下の図で見ると岩崎町は明治39年豊橋市に合併している。一方多米は昭和7年に豊橋市に合併している。

多米東町一丁目	251 世帯
多米東町二丁目	274 "
多米東町三丁目	273 "
多米中町一丁目	288 "
多米中町二丁目	261 "
多米中町四丁目	256 "
多米中町二区	385 "
多米中町三区	320 "
多米西町一丁目	221 "
多米西町二丁目	294 "
多米西町三丁目	288 "
岩崎町	202 "
計	3,313 "

多米校区町内別の加入世帯数（平成18年）



第2章 歴史と生活

1 校区の歴史

(1) 原始時代

牛川人 この多米の地に、いつから人が住み始めたのだろうか？ 西隣の鷹丘校区では赤岩口電停から北に少し入った石灰岩採掘場で、8～5万年前の牛川人骨が発見された。

また、弓張山系の尾根を北に行くと、嵩山の蛇穴があり縄文時代早期の遺跡が発見されているので、この多米にも早くから人がいたのではないかと想像してもおかしくない。

多米では、神石の巨岩の下に穴居跡らしいものがあったというが遺物は見つかっていなくて、弥生土器が出土した坪尻遺跡が最古とされてきたが、平成13年、稲荷山古墳の発掘調査で縄文土器が出土して、多米の歴史はもっと昔へとさかのぼることになった。

多米古墳群 朝倉川上流の山麓には多数の古墳が点在しており、これらを総称して多米古墳群と呼んでいる。豊橋市教育委員会調査報告書によると古墳の総数は88基に及ぶ。

キジ山古墳群 35	野中古墳群 7
坪尻古墳群 20	赤岩山古墳群 5
寺門古墳群 5	稲荷山古墳群 5
白山古墳群 3	埋塚古墳群 3
八幡山古墳群 2	南山古墳群 3

この他に、滝ノ谷古墳、日吉神社古墳、米山古墳がある。

これらの古墳群はすべて円墳であり、最大のキジ山2号墳は径17.7 m、高3 mである。構築時期は古墳時代後期（6世紀末）といわれ、多くはこの地を支配した多米の族長級の

人々の墳墓であったと考えられる。

多米連 多米という地名は、この地を支配した族長の名と関連があるのかもしれない。

9世紀初めの『新撰姓氏録』に、成務天皇の代に、小長内命という者が大炊寮に仕えて多米連の姓を賜った、とある。大炊というのは食糧管理が仕事なので、多米となったのかもしれない。これは350年頃と推定される。

『日本書紀』『続日本紀』にも田目皇子・田目皇女や田目宿弥、多米王・多米連福雄の記述があり、東三河が穂の国といわれた頃、この地は多米部と呼ばれる部族の支配を受けていたものと思われる。



キジ山古墳群

徳合長者 もう一つ多米の地名については徳合長者の伝説も切り離すことはできない。

崇峻天皇（587～592）の頃、滝ノ蔵人正時清という者が多米村の東に住んで、滝山長者と名乗っていた。時清は、河内国で聖徳太子の説法を聞き、太子から「徳合長者」という名を賜わり、大日如来像をもらい受けて帰ってきた。

2代目の長者兼成は、行基の作った千手観音などを滝山に祀った。その後、この土地が

ますます開けて米が多くとれたので、村の名前を「多米」と変えたという。

滝ノ谷には徳合長者の屋敷跡があり、埋塚古墳は徳合長者の墳墓とも伝えられている。

(2) 古代から中世へ

多米郷 大化改新のあと大宝令(701)が制定され、全国を国・郡・里(後に郷)に組織して中央集権国家の基礎が整えられた。

穂の国とよばれていた東三河は、三河国に統合されて、宝飫(後に宝飯)・八名・渥美の3郡に分けられた。郡の境界は豊川をもとにして、右岸を宝飫郡、左岸の朝倉川以北を八名郡、その南部を渥美郡とした。

里は50戸で1里とした。平城宮跡から出土した和銅6年(713)の木簡に「八名郡多米里多米部磨庸米五斗」というものがあり、八名郡に多米という里があったことがわかる。

また承平年間(931~938)に編纂された『和名抄』には、八名郡に7郷があり、その一つに多米郷があがっている。一方、岩崎は渥美郡になるが、渥美郡6郷の中に岩崎という郷はなく高蔵郷に含まれていたと思われる。

境川 多米と岩崎の地境は境川であった。『上岩崎村差出帳』(寛延3年)に「渥美郡・八名郡境ニ細川御座候、古来ヨリ多米村・岩崎村此水ニテ田方相続仕来申候」とあり、『多米村誌』に「境川ハ村の南方ニアリ常水5寸、幅最モ狭キ処3尺」と記述されているように境川とは名ばかりの小さな川であった。

多米と岩崎が隣接地でありながら、長期にわたって一度も同一行政区にならなかったのは、この郡の違いと境川のためであった。

岩崎御園 平安時代になって班田制が崩れ墾田私財法ができると、有力な貴族、寺社は競って私有地(荘田)を増やしていった。

東三河では伊勢神宮の領地が多く、延文5年(1360)の『神鳳抄』には、鎌倉時代に神

宮領となった岩崎御園が載っている。御園は野菜を栽培する土地を指していたが、後には耕作する農民や居宅も含むようになった。

また、手洗・上岩崎・下岩崎3村を出崎荘と呼んで、地名として用いたこともあった。

鎌倉街道 建久元年(1190)、全国を平定した源頼朝は上洛の途についた。『吾妻鏡』によれば10月3日鎌倉を出発し、18日には遠江国橋本(新居)に着き、当地方を通過した。

そのルートは鎌倉街道とよばれ、浜名湖西の白須賀から中原に出て雲谷の普門寺へ、船形山を越えて岩崎から多米へ、さらに乗小路峠を越え忠興・和田を通り、当古あたりで豊川を渡り古宿(豊川)に至った。



当時、普門寺住僧の化積上人は頼朝の叔父であり頼朝は普門寺に2、3日滞在した。

頼朝は、多年にわたって平家追討の祈祷をしてくれた功績に報いるために、普門寺領として雲谷、岩崎両村を寄進し、さらに三河国地頭安達藤九郎盛長に命じて、普門寺・赤岩寺などに三河七御堂を建てさせた。

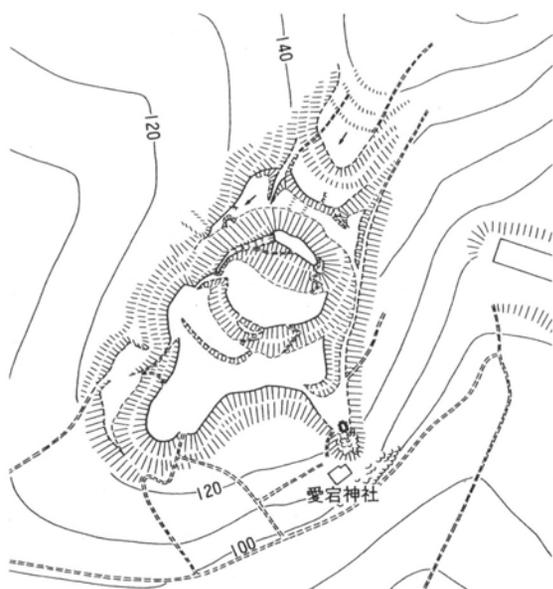
その後も岩崎では支配者が何度も代わり、例をあげると、建武3年(1336)結城宗広が駿河の領地を渥美郡内の9郷と交換した時に岩崎が入っており、弘治3年(1557)今川義元は岩崎を日藏院に、翌年に下岩崎を全久院に寄進した。桶狭間の戦いで今川が敗れると今度は松平元康が戸田主殿助に岩崎の支配をまかせている。

赤岩城 戦国時代になると、各地に武士化した土豪が出て城を築いた。赤岩城は赤岩山の尾根上にある。南麓の赤岩寺に残る永禄11年(1568)の棟札に「願主戸田左門介」とあり、戸田一族の城といわれている。

遺構は薬師堂上方の尾根に主要な郭が3段階に削平されており、全長60m、幅20m。

尾根を断つ堀切は幅10m、長さ30m、深さ8m。その南にある山を掘り残した土塁は高さ8mで、ここを攻め込むのは困難である。

城跡は現在、豊橋市の公園として整備されていて、訪れる人も多い。すぐ下には吉田藩主の信仰が厚かった愛宕神社もある。



赤岩城の縄張図

ふなかつやまかつせん
船形山合戦 岩崎の南、弓張山系にそびえるNHKテレビ中継所を尾根伝いに北東に進むと船形山城跡に出る。標高276mである。

この地は三河と遠江の境にあるため戦略上の重要な拠点となり、駿河の今川氏はここに山城を築いて西進の足がかりとした。築城の時期は明応年間(1492~1501)とされる。

山城は南東の尾根筋に築かれ長さ240m。本丸にあたる平坦地を中心に北東隅に大きな空堀があり、西崖下に腰曲輪があった。

今川氏の内紛を好機ととらえて二連木城を

築いた戸田宗光は、明応8年(1499)今川側の多米又三郎が守る船形山城を攻め落としたが、すぐに今川氏の反撃を受けて宗光は討死にし、合戦に破れた戸田氏は田原に退いた。

その後も永禄7年(1564)、今川氏が吉田を攻めた時に小笠原安元が船形山城を守ったこと、同11年、徳川方についた小笠原広重・信元親子が武田氏の勢力拡張を防ぐために船形山城を守ったことが記録に残っている。

多米城(元益城) 多米城は稲荷山南東の平地に多米元益が築いた城といわれる。

今は畑や宅地となり遺跡は何も残っていないが、明治の頃には城屋敷とよばれ約50m四方の畑の周りを山が取りまいていた。

多米氏は吉良町鷺尾氏の子孫が多米に移住して多米氏を名乗ったと伝えられている。

元益は若い頃に武者修行中、北条早雲と出会い、その片腕として活躍したといわれる。

その子の元興も、後に青木城主(横浜市)となり、北条氏臣下として名をあげた。

永正12年(1515)、多米周防守元興は父元益の出生地である多米村に祖先追福のために本願寺を建てたが、後に三沢に隠棲して、天文6年(1537)、この地に寺を移して豊願寺ふげんじと改めた。豊願寺には多米一族の墓がある。

元興の子、長定も上野西牧城主として務めていたが、秀吉の小田原攻めが始まると伊豆山中で豊臣勢と戦い討ち死にした。

ここで多米氏の主流は絶えたが、長定の弟家元の遺児の時安がのちに徳川家康に仕え、家康の第5子松平信吉付きとなった。

本願寺の所在地はよく分からないが、多米の旧字名に寺門があるから、そこであろう。

また豊橋市史には、「横浜市三沢の豊願寺にある甲冑と鎧は三州多米周防守の寄進したものである」とあり、これは船形山合戦で城を守った多米又三郎のことと思われる」とあり、多米氏についてはいろいろな諸説がある。

(3) 江戸時代

寛永検地 江戸時代を通して、この地の村は吉田藩領となり、その支配を受けた。寛永6年（1629）の検地帳から石高をみると、

渥美郡手洗村50石 八名郡多米村679石
渥美郡岩崎村543石 八名郡赤岩村18石

ここには下岩崎の名が出てこない。下岩崎は岩崎村が開いた土地であり、初めは岩崎村に含まれていたが、延宝3年（1675）の検地により正式に上岩崎村と下岩崎に分かれた。両者は後に合併の関係で岩崎と岩田に分離したが今も鞍掛神社の祭礼を一緒に行っている。

岩崎村で一番の地主は加兵衛である。加兵衛は岩崎村の庄屋であり、小柳津久柏の子である。久柏は二連木城の戸田氏に仕えた武士であったが、年老いて岩崎に屋敷を拝領して移住した。兄たちはよそに出て武士を続けたが、加兵衛が後をついで農業をしていた。

後に小柳津家は岩崎を離れたが、今も岩崎には加兵衛畑と呼ばれる土地があり、龍岩院には久柏の墓が残っている。

助郷 当時の東海道宿駅は、吉田、二川の2宿であったが、周辺の村は宿駅の人馬不足を助ける義務を助郷として課せられ多米・岩崎の村は二川駅の助郷になった。

助郷村には助郷高が決められ、この助郷高に応じて各助郷村に振り当てられた人馬数はさらに村々で各自の持高に応じて配分されたので、助郷負担の増大は農民たちにとって厳しいものとなった。

村名	村高	助郷高	問屋迄道法
岩崎村	668石	489石	20町
手洗村	59石	54石	1里10町
多米村	692石	571石	1里18町
赤岩村	25石	16石	1里10町

『二川宿助郷帳』享保10年（1725）

利兵衛池 江戸時代になり豊橋の内陸部に多くの新田が開かれた。寛文7年（1667）篠田

村の弥兵衛と吉田の利兵衛が吉田領主に願い出て田尻原の台地に平川新田を開発した。

平川の地は水が乏しく、新田開発に際して用水の確保が必要であったため、岩崎葦毛の下に溜池を設けて、開発者の名をとって利兵衛池と称した。さらに蟬川（朝倉川）に井堰を設けて不足の用水を得ることにした。

平川新田の開発により、新たに用水問題も起きた。蟬川の水は下岩崎村が用水として使っていたために冬季の通水権しか得られず、平川地内に水神池をつくり貯水した。この用水路の一部は上岩崎村に新設せざるを得ず、問題となった。



利兵衛池（現利兵池） 後方東陽中学

入会争論 五人組や宗門攻めなど農民支配が強まり、村高を決めて年貢を納めるようになると村のまとまりが強くなったが、一方では村の閉鎖性・排他性を助長して、時に村境や入会池・用水問題をめぐって、隣接する村と争いが生じるようになった。

手洗村と上岩崎村との間ではズシ地内で村境をめぐり争った記録も残っている。

草刈りや薪をとる^{まぐさば}秣場は、村々の間で取り決めをして利用していた。岩崎では米山や南山が両岩崎村と手洗村の入会となっていた。

丸山をめぐる岩崎村と田尻村との間の山論に寛文9年（1669）、役所は裁許状を下した。これにより、岩崎村の言い分通り、田尻村は丸山への出入りが禁じられた。

(4) 明治になって

壬申戸籍 愛知県が発足したのは明治5年(1872)であるが、これに先立ち県内を大区、その下に小区からなる戸籍区を設けて行政機構の確立を図った。初め宗門人別改帳を戸籍代わりにしたが、新たに戸籍の編制を進めた。

次に、八名郡赤岩村の壬申戸籍(明治5)の記載例をあげる。(赤岩区有文書)

第九大区 内第三小区 赤岩村戸籍	父五郎右衛門 亡	壬申年
八百十番地所	戸主 大木熊藏	五十二
当国渥美郡小島村		
朝倉松藏長女	妻 いち	四十八
	長男 幸吉	十九
	長女 きよ	十五
	次女 きよ	十四
合 男二人		
女三人		
氏神 稻荷大明神		
当村真言宗赤岩寺		
右之通相違無候		
壬申四月		
大木熊藏		

さらに明治7年に戸籍の再調査が行われ、末尾に宅地・田畑・山林・原野の土地所有面積や建物・土蔵の坪数等が付記された。

町村分合 明治9年、県は村々に「合併村願」を出願させた。従来各村のままでは狭小すぎて一定の行政水準を維持するのが困難であるため、明治11年の「町村編制法」の施行により大がかりな町村合併が行われた。

この時、赤岩村は多米村と合併された。

手洗村・上岩崎村・下岩崎村は、田尻村・平川新田と合併して岩田村となった。

これはかなり強行な施策であったため、その直後から分村騒ぎが起こり、17年の改正でもともにもどったものがあった。

旧手洗村と旧上岩崎村はこの時に岩田村から分離して、新たに岩崎村となった。

明治22年には町村制が施行され、町村は自

治体としての法人格を認められ、町村長・助役・収入役から構成される町村役場ができた。

この時、岩崎村は再び、岩田村・瓦町村・東田村と合併して、豊岡村となった。

多米村は三輪村と合併して美米村となったが、明治25年分村して再び多米村となった。

その間の事情を示す「分村願」を挙げる。

分村願

八名郡美米村大字多米

当大字多米義ハ明治廿二年九月町村制ヲ施行セラレルニ際シ元三輪村・多米村ト合併シ以テノ自治区ヲナスベシト御制定有之候処元来大字多米ハ大字三輪ト全ク民情習慣ヲ異ニシ又天然ノ地勢ニ於テモ大ニ其域勢ヲ別ニシ遠ク山岳ヲ隔テ其距離モ殆ド二里弱モ有之将来強テスノ民情習慣ノ異ニシテ相容レラザルニモ拘ラズ又地勢ノ異ナル相遠隔スルニモ永ク之ヲ合併シ居ラセントセバ其困難ヲ蒙リ其不便ヲ受クル実ニ一ニシテ足ラザルベク到底自治ノ自治タルノ実ヲ視ル事能ハズ独リ我大字ノ不幸ナルノミナラズ自治全体ノ不幸ハ明ナル処ニ御座候此故ニ大字一同ノ人民ハ痛歎止ムナク日夜議ヲ此ニ凝ラシ自治全体ノ困難不禍之候依テ今般当村会ニ対シ分村ノ議ヲ申立候処村会ニ於テハ別紙意見書ノ如ク可決セラレ候且当大字ハ従前ヨリ設置有之候共有財産ノ収益ヲ以テ将来法律上ノ受クベキ義務ヲ負担シ決シテ兼タル議無之候間何卒願意ヲシテ徹底セシメ賜リ度依テ村会意見書相添ヘ此段奉願候頓首再拜

明治廿四年八月二十七日

百五十二名連署

^{ちそかいせい}**地租改正** 明治14年に提出された「多米村誌」に、参考になる記述がある。

税地	旧反別 (明治8)	新検反別 (明治11)
田	37.5町	66.5町
畑	8.6	29.0
宅地	3.0	7.9
山林	17.7	51.7
雑種地		3.6
総計	66.9	119.0
貢租	旧租 (明治8)	新租 (明治11)
地租	1,194.8円 (此米273石)	930.4円
雑租	1.2	11.0
総計	1,196.0	940.6

税地が大幅に増加しているのに、貢租が減少しているのはなぜか、疑問が出てくる。

耕地面積の変遷では、旧反別はそれほど信頼度が高くなく、むしろ明治11年の改正反別がより信頼できる。旧租は江戸時代の年貢を引継いだものであるが、新租は地租改正の影響によるものである。

政府は財政収入の安定を図るために、土地所有者に地券を与え、その地価に応じて地租を納めるようにした。最も大きな改革は年貢米としての物納が金納になったことである。

手洗村の『地券証拠申受帳』(明治6)には、

字森上27番	当村
1、屋敷畑	1 反歩 地主若山八百蔵
	此高 7斗1升5合
	此地価 7円
字森下9番	
1、田	4畝27歩 地主 同人
	此高 4斗3升
	此地価 3円70銭

とあり、地価が明記されている。

(手洗村区有文書)

改正には正確な土地面積を把握する必要があり、土地の測量には時間や問題があった。

上岩崎村では、明治9年4月に『地租改正丈量野取帳』が作られ、8月には『地引帳』が完成している。多米村の『地引帳』42冊は8年と9年の日付がみられる。また、山林原野その他価値のある土地は徹底的に対象となり、多米村では10年に『地券山調役改帳』、上岩崎で11年に『山林原野反別地価扱帳』ができ、地租改正には7年もかかった。

養蚕 地租が金納化されたために、農村に貨幣経済が浸透してきた。金納である以上、農民は貨幣を手に入れることが必要になった。

『多米村誌』で当時の農業実態をみると、

民業	全村男女トモ専ラ農耕ヲ励ム、 其暇ヲ以テ男ハ薪木ヲ伐リ、女ハ 機織ヲナス		
物産	明治12年		
米	743石	麦 182石	粟 17石
黍	11	稗 29	大豆 45
小豆	2	藁麦 16	蜀黍 1
甘藷	5,890貫	実綿	190貫
葉煙草	11貫	菜種	2石

これから分かるように、初期には米麦を中心に雑穀を作り食用としていたようである。

その中に、甘藷・綿・葉煙草・菜種などの商品作物の栽培もしていたことがわかる。これらの商品作物のその後の推移を見ていくと綿花は輸入綿花の増加により激減し、甘藷も明治末年にかけて激減している。

一方生糸の輸出増に伴う製糸業の発達とともに養蚕がさかんととなり、畑作物の変化は桑畑の増加となった。

多米にも明治38年、赤岩に山本製糸場ができて、職工女30人、数量270貫、価格6,900円の生産があったという。(豊橋市史)

(5) 大正から昭和へ

電灯契約 大正14年(1925)5月、多米に東邦電力会社より配電されることになった。電柱の運搬や穴掘り等は村民が受け持ち工事を急いだので、8月10日に工事終了、小学校において盛大な点灯式を挙行了した。

多米電燈組合から東邦電力に出された電燈数の契約書が残っているので抜粋してみる。

- ・点燈区域は石巻村大字多米地内にして先に設計した電柱102本より容易に引き込み得る場所に限る。
- ・点燈戸数及び燭力は定額門燈8燭13個、同室内10燭289個、半年点燈16燭40個、8燭89個、合計351個とする。

上水道 大正9年(1920)豊橋水道会社が水道布設の許可申請書を愛知県に提出した。

八名郡三上村地先の豊川を水源として石巻村大字多米の赤岩山頂に大貯水池を築造、豊橋市内などへ給水しようとする計画だった。

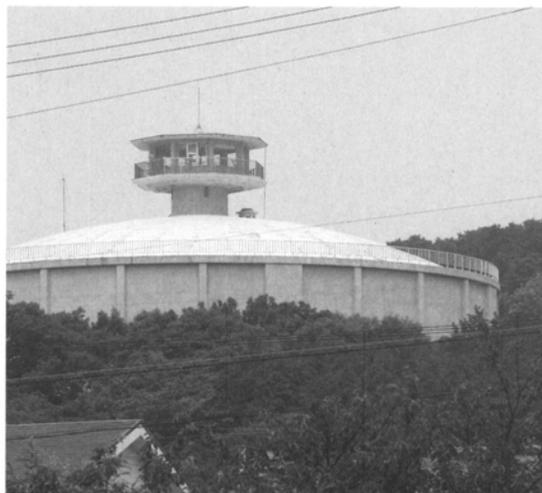
大正12年、豊橋市は都市計画法適用の許可を受け、これを契機に市営の上水道布設を決定し、翌年から調査を開始、水源地として八名郡下川村大字西下条地先の豊川を選定した。

昭和2年(1927)7月18日、石巻村大字多米の屏風岩山頂で起工式を挙行。浄水場は下川村小鷹野に、給水場は石巻村大字多米字蟬川に建設され、4年に通水および放水試験。

昭和5年3月29日、岩崎と飯村を除く全市域と宝飯郡下地町へ給水を開始した。岩崎町は、田畑、山林、原野が大部分をしめ、人口が非常に少ないので給水区域から外された。

多米は給水場を持ちながら長い間、給水区域ではなかったが、昭和39年から始まった上水道第4次拡張事業で、やっと一部給水区域になった。また新しく有効貯水量6,000 m^3 の鉄筋造の多米配水池を築造した。

巨大なタンクが今多米西町の後背地の尾根上に高く聳えている。(現在1万 m^3)



上水道配水タンク

豊橋合併 昭和7年(1932)豊橋市は周辺5か町村(渥美郡高師村・牟呂吉田村、宝飯郡下地町、八名郡下川村と石巻村大字多米)を合併し、市域を大きく広げた。

豊橋市は大正12年(1923)に都市計画区域として認可されたが、この5か町村は豊橋市の行政区域外であり、同一行政区に合併しなければ近代都市建設が実現できないため、隣接町村への合併を強く働きかけていた。

また、政府から500戸以下の小町村の救済を意図する指導であった。周辺町村も、大正10年に郡制が廃止されて独立財政となって負担過重で苦しんでいた。

大正13年、八名郡石巻村大字多米は渥美郡高師村と豊橋市へ合併を表明したが、純農村的な多米が都市計画区域への仲間入りをすることは容易なことではなかった。それが一変して実現の運びとなったのである。

八名郡石巻村大字多米は、岩田町と同一区域内にあり、上水道給水場と浄水場が多米地内に設置されており、小学校児童の一部を岩田小学校へと豊橋市に委託しているなど結び付きが強かった。

昭和5年(1930)豊橋市は近隣5か町村の合併案を発表。7年市議会は合併案の承認。9月1日合併が実現した。

(6) 悲惨な戦争

食糧増産 日中戦争は拡大し、昭和16年12月に日米開戦となり、生活も戦時一色化した。17年7月施行の食糧管理法により主要食糧品は国家管理となった。都市住民への米の配給も玄米と変わり19年には月に10日分位の量で、不足分は雑穀・甘藷・馬鈴薯等の代用品配給で、米食は全くできなくなった。

農村である多米の村人も食糧生産者でありながら、米麦の供出等で苦しい生活を強いられ、雑炊・すいとんを常食としていた。

小学校では5、6年生が裏山を開墾した。

金属回収 資源不足から金属回収令が出され、家庭内の金属製品が徐々に姿を消した。

19年3月には市内各寺院の梵鐘供出が一斉に行われ、赤岩寺・春日神社・龍岩院からも鐘楼・篝火台等が供出され兵器へと代わっていった。ニッケル貨や銅貨も回収され、家庭では鉄製品は陶器に代わって、すべてが代用品時代になった。



復元された赤岩寺梵鐘

防空訓練 昭和17年、米軍は太平洋上の航空母艦から初めての空襲を行った。

18年になると灯火管制がしかれ、黒布で電灯をかくした。防空頭巾の常時携帯、男子は国民服・戦闘帽、女子はモンペの着用が強制された。各家庭はみな防空壕を作り、空襲に備えた。学校の校庭にも防空壕が掘られた。

19年7月、サイパン島の日本軍玉砕によりここに航空基地を造成した米軍の本土空襲が

現実化して、町内毎の防空訓練が行われた。焼夷弾しょういだんを想定し、砂袋の消火訓練、バケツリレー、防空壕への避難等が訓練された。

時を同じくして、19年12月7日、熊野灘を震源地とするM8.0の東南海地震、続いて20年1月13日には渥美湾を震源地としてM7.1の三河地震が起こった。地震災害をはさんで警戒警報や空襲警報の発令は日増しに多くなり、市民は心身共に疲れていた。

豊橋空襲 3月になると、米空軍B29は波状的に本土空襲を繰り返した。4日には豊橋でも多米・下条に投弾した。多米では焼夷弾が八幡山に落ちたが、小型のもので天候も悪くて不発が多く、村人への被害は無かった。

5月14日に名古屋は大空襲を受けて、焦土と化し市の象徴である名古屋城も焼失した。

6月に入ると、米軍は地方の小都市も爆撃の対象とし、豊橋空襲も時間の問題となっていた。18日午前1時浜松が焼夷弾による空襲を受けた。真夜中のこと、多米からも東の空が赤く染まり爆撃の音が聞こえる程だった。

6月19日の夜明け、米軍機1機が志摩半島・渥美湾を経て豊橋方面に姿を見せ、間もなく去って行った。後から考えれば、これは目標地区の偵察機であったのかもしれない。

夜に入り、午後11時、警戒警報が発令されたがすぐに解除された。緊張していた市民も一息つき、市内は静寂な闇に閉ざされていた。

6月20日に日がかかった午前0時40分空襲警報発令と同時に豊橋は空襲が始まった。

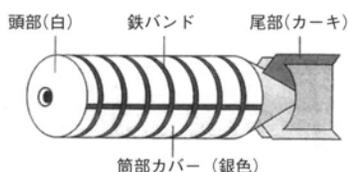
マリアナ基地から発進したB29約200機の内90機は志摩半島方面から侵入し、3時頃まで豊橋市に焼夷攻撃を行った。市内各地に火災が発生し、朝8時過ぎまで市街地は燃えていた。数時間のうちに死者644人、重軽傷者3,444人の犠牲者を出した空襲であった。

東脇の被災 この日、多米町字東脇でも空襲による被害があった。戸数11戸のうち8戸が

焼夷弾により炎上した。この空襲では、開始時刻が20日未明近くで市街地の空襲とずれがあり、市街地から離れた農村の多米になぜ焼夷弾が投下されたのか、疑問が残った。

これについては、新聞では豊橋空襲の特徴として、「焼夷弾投下と共に絶えず低空で機銃掃射を加えたり、市街地の投弾と並行して接続農村へも波状爆撃を行い、避難者の逃道をなくし皆殺しを企画した戦法である」とあるから、戦略の一つであったかもしれない。

M69集束焼夷弾を分解すると



東脇に落とされた焼夷弾

本土決戦 昭和20年6月21日、沖縄が米軍の手中に落ちると、次は、本土への攻撃、それも太平洋に面した豊橋地方への米軍上陸を想定し市民の不安は高まっていった。

東三河一帯には第73師団(怒)が配備され、それを統括する司令部が宝飯郡国府町におかれ本土決戦への構えをみせていた。

この近くでは、岩屋に大砲の陣地が築かれ飯村町高山に地下戦闘指揮所が作られた。

市内各地に本土決戦に備えて多くの兵士が駐屯してきて、緊張は一層増していった。

多米校区では、多米国民学校・歓喜院・龍岩院・春日神社・民家などに部隊が合宿して掩壕などの陣地構築に励んだ。掩壕は敵の銃や砲火に対して待機中の兵馬や兵器等を掩護するための壕であり、手洗、南脇、福田など

の山麓に、坑道式の掩壕が数多く構築された。

葦毛湿原の周囲には戦車用の燃料の貯蔵壕が築かれ、その数は150基にも及んでいる。

仔羊幼稚園西の掩壕からは長尾地区にかけて今も延べ1kmに及ぶ交通壕が残っている。

集団疎開 米軍の本土上陸に備え秘密裡に子供や婦人に対する避難計画も立てられた。町内毎に避難先が決められ、町内会長の指揮の下に徒歩で避難することにした。

記録に残る多米町の集団疎開計画では、

- ・15才以下60才以上の老幼男女を飯田線長岡駅東北の奈根の部落へ避難させる。
- ・16才以上59才以下は本土決戦の義勇軍として町に残る。
- ・老幼男女は8月16日早朝に出発、1日目八名郡富岡止宿、2日目八名郡大野止宿、3日目夕方に奈根の部落に到着予定。

とあり、8月14日夕方迄に米300表を大至急で集め、小学校にいた輸送部隊のトラックで夜の中に集団疎開先の奈根部落へ輸送した。

開けて8月15日正午終戦の大詔が放送されたので、疎開せず事無きを得た。

招魂祭 昭和40年、多米町調査の『第二次大戦従軍者名簿』によれば、出征者従事者数は158名、うち33名が戦病死を遂げている。

また、多米校区遺族会『戦没者名簿』に記載されている76柱の英霊の行年を拝見すると、21~25歳35柱、26~30歳が14柱である。戦没地もミンダナオ、ルソン、ソロモン、サイパンなど南方の地で32柱、中国方面で23柱となっている。

戦争がいかにか若い将来ある人たちの命を奪ったか、遠い異国で望郷の念もかなわずに戦没していった英霊の無念さは如何ばかりだったか、今一度考えていきたい。

多米校区では毎年、戦没者招魂祭を挙行しているが、多くの方の参列を頂き、平和への祈念を深めていきたい。

(7) 戦後の様子

戦後の暮らし 昭和20年（1945）8月15日戦争が終わった。多米町、岩崎町からも多くの人が出征し戦争の犠牲になった。

多米校区は戦前から農業で生計を立てており、旧字の北脇から東脇にかけては畑が広がりサツマイモや麦を作っていた。東西に延びる幹線道路の南側や岩崎町には水田が広がり、ほとんどの世帯が米を作り、冬になると麦畑へと変わった。米作のために溜池や湧水を使っていたが、田植えの季節に水不足になると水の奪い合いもあったようだ。現在でも多米校区にはたくさんの溜池が残っている。

ニワトリや豚を飼う家や、ヤギを飼って乳を飲用にしたり、農耕用の牛を飼う家もあった。魚や豆腐、油などを売りに来る人もいた。

飲料水や風呂、洗濯の水は井戸を使い、手押しポンプで汲み上げた。ご飯を炊く「かまど」があり、山から取ってきた薪や炭を燃料にした。家の屋根は茅葺も多く、夜になると天井から釣り下がった裸電球が灯された。



赤岩展望台から野中坪尻方面（1955年）

供出制度 戦後の食糧難から国策として食糧増産が進められ、供出制度ができて主要農作物の供出が義務付けられた。農家は一定量の保有米のほかは米を供出するために食べるものにも充分でなかった。保有米の確保、供出の完遂と食糧増産に追われ、夜の明けきらぬ

うちから日の沈むまで黙々と働いた。

供出の米を選り分けるために米選機という道具が使われた。米を上から少しずつ落とし、木枠に金網を張った篩を傾斜状にして目の大きさより小さな米と選別する。網目より小さなものは下に落ち、大きなものは下まで到着する仕掛けである。下に落ちたくず米であるシナ米（やせたくず米）や青米（胚が未熟で緑色をしたもの）は供出できず、農家ではそれを食料にした。



米選機

航空灯台 昭和22年に設置された航空灯台は、岩崎町、雲谷町、湖西市の三角形の分水嶺にある神石山の山頂にあり、暗くなるとくるくと空を明るく照らした。

設置工事には岩崎町の人たちが雇われ、20～30人の人手で全ての機材を担いで神石山まで上げた。基礎部分は100kgほどもあり、担ぎ上げる道を作りながらで大変な苦勞をしたそうである。

管理は小牧の航空センターが行っており、維持管理には岩崎町の人が委嘱され電球の交換などを行っていた。約20年間使われたが、撤収の際、全ての機材を返納したので今では何も残っていない。灯台は眺望の良いところにあつたので秋の遠足の地となった。最後の登り口は急坂で小学生には大変きつく一苦勞して登った。

のどかな田舎 赤岩の公園は、春は桜、秋は紅葉で有名な観光地であった。花見客が市内外から訪れて綿菓子、だんごなど屋台も出て賑わった。西の山の頂上には展望台があり、市街や三河湾が一望できた。

昭和39年（1964）の東京オリンピックが近づくころには各家庭にテレビが普及し始め、テレビが入った家には近所の人が集まってきて力道山の空手チョップや紅白歌合戦を皆で楽しむこともしばしばあった。

当時は村のお付き合いがしっかりしていて、道普請、どぶさらいなど村中総出で共同作業をした。家の新築の手伝いや、冠婚葬祭なども隣近所の助けが欠かせなかった。

梅雨時の田植えや、秋の稲刈りにはどこの家庭も弁当持ちで子どもから大人、老人まで家中総出で働いた。はぎに乾した稲の脱穀が終わる頃には日が落ちて、薄暗い中を舂米を積んで家路を急ぐリヤカーや三輪トラックが走り回っていた。

そうした一年一年が何年も何年も続くように思われたが、徐々に時代は移り変わっていった。日本経済の発展とともに農家の人も現金収入を求めて働きに出る人が多くなっていった。果樹栽培（柿）、園芸、養鶏、養豚、酪農などへと農業の多角化も進んでいった。

日本の社会が戦後の復興を遂げ経済が急速に発展を始め、豊橋市の東の外れの多米校区にも影響を及ぼし始めていた。

豊川用水 豊川用水は豊川水系の宇連ダムを水がめとして天竜川水系からも導水し、渥美半島まで水を運ぶ東部幹線、蒲郡方面への西部幹線の2つの巨大な水路と、それぞれの幹線からの支線に及び、農業用水、都市用水、工業用水を供給する大規模プロジェクトとして計画された。

この構想が生まれたのは大正時代のことで、渥美郡赤羽根町出身の近藤寿市郎氏が東南ア

ジア・ジャワ島で目にした農業水利事業にヒントを得たものだった。

豊川用水の提唱は「世紀の大ぼら、理想に走った夢物語」と一笑にふされ大正時代には実現できなかったが、昭和の初期には大規模開墾計画に伴って再浮上した。これは第二次世界大戦の影響でとん挫したが、戦後になって再び、東三河の将来的な発展のために必要不可欠なものであるとして、構想の実施が推進された。

後に豊橋市長にもなった近藤寿市郎氏の銅像が、赤岩山に建てられている。



近藤寿市郎氏銅像

豊川の支流、宇連川の大野頭首工（鳳来町）で導水され、大野導水路を通り東西分水工で東と西の幹線水路に分かれる。山裾や河岸段丘に沿って緩やかに流れ下り、石巻町の三ツ口池から三多トンネルを潜って多米の北東の山裾に顔を出す。しばらく開渠となって流れると多米サイホンに入って幹線道路の下を潜り抜けて顔を出し、南脇から岩崎町をゆったりと流れ、再びトンネルを潜って大脇町へと流れていく。

この用水を作るにあたっては、多米校区の人たちも多くの影響を受けることになった。

開墾組合 戦後、多米の山裾では国有林の払い下げや、平地の山林を開墾する開墾組合が山林を切り拓いて農地を造成していた。そうした折に豊川用水が開墾した地区内を横切るといふことになり、将来的に地域の発展の障害となることを心配する人もいた。

しかしながら、この用水が東三河全域の開発のために必要なものであることから、進んで協力をするようになった。



豊川用水（岩崎町からトンネルで大脇町へ）

多米公民館 豊川用水公団の支援によって昭和37年（1962）起工し、翌昭和38年5月16日に竣工した。

それまで多米校区にはこのような施設がなく、完成後は総代会、各種団体、小学校などの大きな行事は全て公民館で行われることになった。

落成式には、豊川用水記念碑の除幕式と式典が執り行われ、夜には牛久保町の市川少女歌舞伎の三番叟、漫才、手品、浪曲等のプロの芸人を招いて演芸が盛大に行われた。

公民館の敷地は、墓地・埋葬地であったので、埋葬者の霊を祀るために供養碑が忠魂碑の西隣に建てられた。

（昭和38年3月吉日建立）



多米公民館

市電の延伸 多米校区は、赤石山脈の尾を引く弓張山系の低い山々に北、東、南の三方を緩やかに囲まれ、朝倉川と内山川が校区の南を流れている。多米からの出入口は西の蟬川橋と南に向かって鞍掛神社の横を通り岩崎から高山を越えていく道の他には幹線道路がなく、地形的に近隣から閉ざされていた。

市電が競輪場前から赤岩口まで単線ではあるが延長されたのは昭和35年（1960）のことで、多米の人にとっては画期的なことであった。町に行ったり駅に行くのが格段に便利になり、いつかは市電も多米まで延長されるのではと期待をしていた。



赤岩口電停（写真提供：白井良和氏）

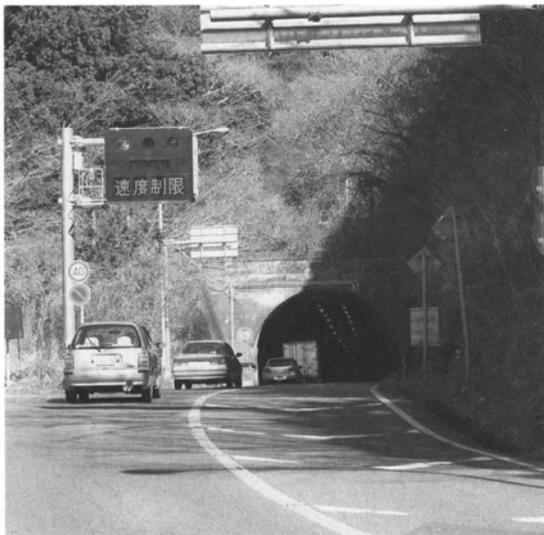
バス路線 市内循環バスの岩崎線は、東田から出て競輪場前、井原、赤岩口、野中、赤岩、多米小学校前、駒止、岩崎を通り高山に吸い込まれていった。開設は昭和36年（1961）5月のことで、日に5往復ぐらいしかなかったが多米町、岩崎町の人々にとっては重要な交通手段であった。

主要地方道豊橋大知波線 昭和38年7月多米地区は東三河工業整備特別地域に組みこまれ、静岡県側の西遠工業整備地区と接続するため幹線道路としての豊橋大知波線の整備が計画された。

愛知県側は多米町を貫くこの幹線道路の改良・拡幅に乗り出し、多米町総代に用地買収の交渉を委託した。この用地買収は、昭和38年に開始されたが農地の減少、買収価格の不調などの問題もあった。そのため農業で暮らす多米の人々に困惑をもたらしたが、昭和40年1月20日起工、翌年6月29日多米峠有料道路開通式が行われた。工事延長距離6,352m、総事業費6億1千万円をかけ完成した。

愛知と静岡の両県を20分で結ぶこととなり、物資の流通が盛んになった。

同時に多米トンネルは、多米峠の下140mの位置に掘られ長さ525mである。



多米トンネル

有料道路 昭和41年7月にオープンした有料道路は多米側に料金所が置かれ、多米町の滝ノ谷から県境へ1,348m、静岡県側1,487mの2,835mである。

昭和62年6月30日までに21年間有料道路として2,760万台余の利用があったが、昭和62年7月1日から無料開放された。

この道路ができた当初、東岡崎から浜松を結ぶバス路線が遠州鉄道、豊橋鉄道、名古屋鉄道の協力で運行が開始された。各会社の色とりどりのバスが定時に多米の町を走り抜けて行った。現在は休止されている。



多米峠有料道路料金所

多米の夜明け 多米町における公共事業として、豊川用水事業と主要地方道豊橋大知波線の改良、拡幅工事、多米トンネルの開削が行われた。これまで農業を主体に生活を営んでいた多米校区の人々にとっても経済発展を間近に感じられる機会となった。

現金収入を求めての兼業農家の増加や家庭への電化製品・自家用車の普及に代表される生活レベルの向上が徐々に進行していった。

こうした動きは、今日の多米の礎を築くことになる多米土地区画整理事業へと発展していく契機となった。

(8) 新たな出発

農地から宅地へ 多米校区の産業、人口、そこに住む人の移動は、昭和45年（1970）に工事が始まった土地区画整理事業が大きく関わっている。昭和60年に完工式が挙行された区画整理事業により複雑だった土地が整備され、そのほとんどが田んぼであった土地は宅地に生まれ変わり、新しい住宅が続々と建設されてきた。

昭和39年から始まった上水道の給水に加えて、昭和48年からは下水道工事が始まり、分流式（汚水と雨水を別々に流す方法）での整備がされた。また、都市ガスが布設され、住宅地としての生活環境はますます快適なものとなっていった。

昭和58年には現在の町名に変更され、新しい町名は土地区画整理内を大きく3つに分け、多米東町、多米中町、多米西町となった。

土地区画整理に伴い多くの字名は消えたが、幹線道路の北側の区画整理を行わなかった一部に古い字名が残っている。また、公園や橋の名前としてできるだけ旧字名を残すように配慮されている。

多米土地区画整理事業 豊川用水の整備と主要地方道豊橋大知波線の拡幅という多米町を揺るがす状況変化に伴い、多米町の将来をどのようにするのかという大きな問題が町民に提起された。先祖伝来の農地を埋め立てることに多くの農家は困惑していた。

豊川用水受益地としての農村的整備か、県道拡幅を契機にした都市的整備を行うのかという二者択一の問題であった。

経済の高度成長を背景とする兼業農家の増加も現実はこの多米において進行しており、将来への方向性も含め、町総代を中心とした地域開発研究会が設けられた。

しかし、伝統的な農業で生計を立ててきた町民に、農地を改廃し区画形質を変更して宅

地化を行うことに賛同が得られるのかということとは結論の出ない問題であった。

様々な紆余曲折を経る中、地権者の9割が宅地化に賛成であるとのアンケート結果を得ることができ、地域開発研究会は区画整理準備委員会へと発展的に移行されることになった。昭和40年のことである。

その後、昭和44年9月1日に土地区画整理事業が認可された。それを受けて、同月10日に地権者420名にて豊橋市多米土地区画整理組合が設立された。

水田の埋立整理、都市計画道路の東三河環状線の用地確保、区画道路、排水路の築造、上下水道や都市ガスの布設、橋梁、公園の整備と様々な都市基盤の整備事業が実施された。

総事業費 51億1,700万円

事業認可 組合設立 昭和44年9月1日

換地処分公告日 昭和58年9月30日

減歩率 29.56%

種 目	地積 (㎡)	%
公 共 用 地	480,878.49	30.81
宅 地	922,721.52	59.11
保 留 地	157,357.36	10.08
総 計	1,560,957.37	100.00



区画整理記念館（現東陽地区市民館）

柳原団地 多米校区のほぼ中央に位置するこの団地は、約45,000㎡、19棟710戸の市内最大の団地である。この団地の用地も保留地から生み出された。しかし、学校予定地のように当初から確保されていたものではなく、市側から団地建設計画が持ち込まれたものだった。組合としても「保留地を処分するまでに時間がかかり、その間の事業資金は借金でまかなわなければならない。利子だけでも相当の額になってしまう。だから市の話はありがたく受け入れることにした。」のである。各地に点在する保留地を一か所に集め集合保留地とし、それを市に売却した。

現在地としたのは、次のような理由である。

- ① 多米町のほぼ中央にあり、中央から発展していくため。
- ② ほぼ全域が農地であったため家屋等の移転の必要がないため。
- ③ 朝倉川が斜めに流れ、しかも上空に15万4,000Vの高圧線が通っている。この土地を分筆して個人に売却しても必ず死に地がでるし、高圧線の下では売却は難しい。団地にすれば、駐車場、公園という形で利用でき、死に地が出ないため。



柳原団地

電波の谷間 「電波の谷間多米……」「テレビ難視聴のため値下げしても売れない保留地」と大々的に報道され、順調に進んでいたかに見えた土地区画整理事業に暗い影が投げかけられた。オイルショックの影響で土地が売れなくなっている上に、更に追い討ちをかけられた。

確かに多米地区のテレビの映りは悪く、どこの家でも感度の良いアンテナを使用していたがそれでも良い映りではなかった。昭和52年(1977)にNHKが二川の山頂にUHFの中継所を設置するまでは、NHKも映りが悪かった。西側を除けばすべて山に囲まれたこの地区では無理からぬことであった。その報道の後にすでに保留地を購入している人からもキャンセルが相次いだ。

組合としては、このまま放置しておくわけにはいかず、NHKは言うに及ばず、民放や電波管理局、郵政省にまで足を運んでいろいろな方面からのアドバイスや、民放との話し合いの結果、民放4局の機械を組合が負担するという許可があり、NHKの中継所の建物を借りて民放4局の中継所が完成した。4,600万円の費用がかかったが、こうして「電波の谷間多米」の汚名は返上され、やっとくっきりと映るようになった。

朝倉川改修 豊川水系の朝倉川は、毎年のように氾濫を繰り返す河川であった。

組合発足と時を同じくして、県事業によって改修に着手されたが、建設省の治水長期計画のもと、大規模な改修が行われることとなった。柳生川水系の内山川が多米地区内で朝倉川へ接続されることになったのである。この付け替えは、区画整理事業の大幅な変更だけにとどまらず、下流の水害が危惧された。

しかし、昭和47年(1972)に改修工事が完成した朝倉川は景観に配慮したものとなり、心配された改修後の水害は皆無である。

多米小学校の移転 多米小学校の移転については、すでに昭和30年代半ばから論議があったが、県道開通、多米土地区画整理事業の着工、そして柳原団地の建設を背景に、次第にその機運が盛り上がっていった。

昭和48年に団地への入居が始まると、一気に移転問題に拍車がかかった。

昭和42年（1967）、多米小学校建設準備委員会は「多米小学校移転についての陳情書」を市当局に提出した。

朝倉川の対岸、多米町の中央で、かつ岩崎地区からの編入も可能な地に、20学級1,000名規模の新校舎建設予定地が指定された。

土地区画整理組合では、すでに換地設計に基づく仮換地指定が一部始まっていたが、昭和48年多米小学校用地としての保留地の決定と処分が総会で議決された。

その年の10月、20,000㎡の多米小学校建設用地が豊橋市へ売却された。鉄筋校舎とプールを備えた近代的な学校建設の夢が実現への第一歩を踏み出したのである。



多米小学校

昭和50年（1975）建設工事を着工し、翌年3月完成することとなる。

P T A 会員全員の協力で引越し作業が行われた。昭和51年4月新校舎にて新年度を迎えることができた。その後も残りの備品が職員と児童の手で運ばれ、昭和51年7月に全ての移転を終えた。

岩崎町の編入 岩崎町の児童は、多米町と岩崎町の間を流れる境川を境界にして、明治の時代から多米小学校を横に見ながら、4 km近くもある岩田小学校に通学していた。

岩崎町では岩田小学校の過密状態での子どもたちの学校生活や町の将来について、再三再四の話し合いが行われ多米町への編入を決めた。多米小学校が移転するのに伴い昭和51年（1976）4月から岩崎町の46名の新しい友達が多米小学校に通うようになった。

東三河環状線 東三河環状線は、三河港や東名高速豊川IC、名豊道路の各ICなどの拠点を結び、周辺市町との連携する路線として昭和46年（1971）に都市計画決定された。

弓張山系の開削やトンネルが必要な多米・牛川工区は、平成9年（1997）のボーリング調査で破碎帯の弱い地盤が見つかった。

また、自然景観や環境に配慮し、開削部を減らして工区内の大部分をトンネルにするとともに、トンネルを複線化することで構造上の問題がないことがわかり、平成16年（2004）3月に都市計画決定の変更が決まった。

工事は西側のトンネルの開通を優先し平成20年度着工を目指している。開通すれば赤岩口周辺などで発生している渋滞や、通学路や生活道路へのトラック車両などが減らせるほか、牛川方面からの豊橋医療センターなどへのアクセスが便利になる。



多米・牛川工区のトンネル予定地

戦後の農業 戦前においては養蚕業が盛んだったが、戦争をはさんで次第に衰え、野菜や米作りが中心になっていった。耕地整理された水田ができ農道も整備され機械による農作業が効率よくできるようになった。

昭和42年（1967）に完成した豊川用水も農作業に画期的な効果をもたらした。それは、いつでも必要なときに必要なだけ水が利用できるようになったからである。

しかし、多くの土地は区画整理事業で住宅地に変わり、農作業をする土地はどんどん減っていった。専業農家は大型の機械を使い、大規模農業をやるために多米ではなく他の地域に土地を求めた人もいた。



岩崎町の田園や温室

また、温室を利用した大葉（青しそ）作りなどの園芸農家が増えていったが、時代は戦後の高度成長期に入り農業だけでは生活が立ち行かないようになってきたため専業農家が減り、兼業化が進行していった。

農業後継者の問題や、宅地化された土地が次々に売買されたり、後継者の農業離れに起因してアパートが建ち、また駐車場に利用される。こうして、多米における農業は次第に縮小していくことになる。

観光資源の活用 農村であった多米は、現在、住宅地として発展してきている。更に、東部丘陵地帯を背後に持つ自然豊かな立地条件をいかし、観光の地としての役割も担ってきている。



豊橋市民俗資料収蔵室

かつての多米小学校の校舎を利用して昭和53年（1978）に多米民俗資料収蔵室がオープンした。ここでは、5つの展示室（養蚕、製糸、生活、漁労、農耕）からできており、昔の人々の生活がわかるようになっている。現在、民俗資料収蔵室をコア施設とした観光のビジターセンター構想など、施設の有効利用について議論が活発になっていくことが期待される。

この旧多米小学校は、豊橋市制施行100周年記念作品「早咲きの花」のロケ地として使われた。子どもたちの友情、家族、平和の尊さをテーマにしたこの映画は、まさに戦争中の多米の子どもたちを再現してくれている。

また、この地域には、葦毛湿原や赤岩寺、鞍掛神社など、自然、歴史遺産なども多くある。昭和44年には、山地の2,061haが石巻山多米県立自然公園に指定された。豊橋自然歩道は赤岩寺自然歩道、多米自然歩道、神石山自然歩道、葦毛湿原岩崎自然歩道などがある。こうした自然を活用した取り組みも期待されている。

多米校区の人口 平成12年（2000）の人口は、昭和25年（1950）の人口の約10倍にもなっている。昭和55年以降は5年きざみに千人近くの増加が続いている。昔の多米を知る人々にはまさに隔世の感がある。

このことは、明らかに区画整理事業の成果である。宅地化された土地に柳原団地ができ、住宅が建ちアパートが次々に建てられてきたが、まだまだこの傾向が続くと考えられる。

	世帯	男	女	計
S 25.10.1	210	540	553	1,093
S 30.10.1	311	800	849	1,649
S 35.10.1	319	751	793	1,544
S 40.10.1	377	851	917	1,768
S 45.10.1	388	795	914	1,709
S 50.10.1	724	1,303	1,446	2,749
S 55.10.1	1,668	3,057	3,223	6,280
S 60.10.1	1,983	3,782	3,951	7,733
H 2.10.1	2,271	4,207	4,442	8,649
H 7.10.1	2,690	4,565	4,951	9,516
H 12.10.1	3,214	5,037	5,496	10,533

国勢調査の校区の人口（S55以降は岩崎町を含む）

行政町名	世帯	男	女	計
岩崎町	256	406	389	795
多米町	246	310	359	669
多米東町	869	1,281	1,241	2,522
多米中町	1,698	2,307	2,413	4,720
多米西町	917	1,254	1,340	2,594
計	3,986	5,558	5,742	11,300

行政町別人口（平成18年4月1日現在）

注）行政町別のため校区の人口とは若干異なる。

これからの多米校区 区画整理の前から住んでいる人々の間には、昔からの慣習が残っているところもある。米作を中心とした豊作を祈願するものや、雨乞いや防災に関するものであったり、地域や家族の安全や互いの助け合いなどのまつりごとなどである。

古い伝統をもち脈々と受け継がれてきている風習ではあるが、世代が変わり社会状況の変化とともに、こうした伝統・文化の維持継承が難しくなっている。

区画整理後には、団地に多くの人が入ってきた。また、新たに住宅を建て移り住んできた人も多く、今ではそうした人のほうが昔から住み続けている人よりずっと多くなった。新たに住民になった人たちは、春日神社のお祭りや盆踊り、校区の運動会などを契機としたつき合いができて、地域全体にコミュニティの輪が広がってきている。

最近では、柳原団地にブラジル人を中心とした南米日系人の増加が顕著になっている。小学校、中学校にも日本語を話せない子どもたちもいる。同じ地域に住む人たちが言葉の壁、習慣の壁に隔てられて意志の疎通を欠くことは、些細なことでも誤解を生む原因ともなりかねない。こうした人たちとの間で、お互いの理解をより深め、分け隔てなく付き合う方法を見出していくことが今後の課題であろう。

住宅地としての多米校区を、安全で安心できる住みやすい地域にするために住民がお互いに結びつきを強め、助け合い協力しあうことが大切である。そのためには、子どもから大人まで、またお年よりもいっしょになって一人ひとりが地域のことを良くしようとする意識が必要である。

美しい自然環境の中で、住みよい住環境をつくり、そこに住む人々が誇りを持って生きていける地域にしたいものである。

2 産業の変遷

(1) 農業

溜池灌溉 多米には古くから水田が開け、江戸時代の検地帳では、水田90町歩 (ha) で畑の5倍以上になっている。

- ・多米・赤岩村 田48ha 畑10ha
- ・上岩崎・手洗村 田42ha 畑9ha

今の県道の南はみな水田であり、岩崎から遠く岩田までずっと水田が広がっていた。

灌溉用水には溜池の水を利用していた。

多米には滝ノ谷池、新田池。岩崎には手洗池、両止池、長尾池、上影岩池、三太郎池。

岩崎から岩田にかけて内山川には5つの池が連続し、上から宮前池、利兵池、影岩池、上庄池、岩鼻池と呼ばれていた。

溜池の水はいり（水門）から川に流れ、途中のいせき井堰で止められて用水、水田へと流れた。

寛延3年（1750）の村差出帳によると、多米には大井堰が7か所、小井堰が22か所あった。

水は高い所から低い所へ流れるので、田植は上が終わらなければ下はできない。上から順々に田植が始まって、その間、お互いに農作業を手伝っていた。

文化5年（1808）に滝ノ谷池が決壊し修復をした時の記録によれば、多米村の他に上岩崎や平川・田尻・下岩崎の4つの村からも費用や人足を集めていて、滝川（朝倉川）の水が広い範囲に利用されていたことがわかる。

水の利用は自分勝手に使うことは許されなかった。井堰も全部締め切ってしまうと、下流の人が困るので、その割合も決められた。

池のいりをいつ開けるかは特に重要であり、日照りの続いた水不足の夏は、溜池の水がなくなれば大被害となるので、春日神社で雨乞いの祈願が行われたこともあった。

池や川にはきっと水神様が祭られていた。

蛇口からすぐに水の出る今の生活の中で水の大切さを話してもわかってくれるだろうか。

農休み おかしな話であるが、農家が一斉に農業をしないという日が決められていた。6月下旬の田植が終わった頃、村でその日を決めて、この日は誰も農作業をしてはいけないという取り決めであった。

昔の農作業はほとんど手作業であった。

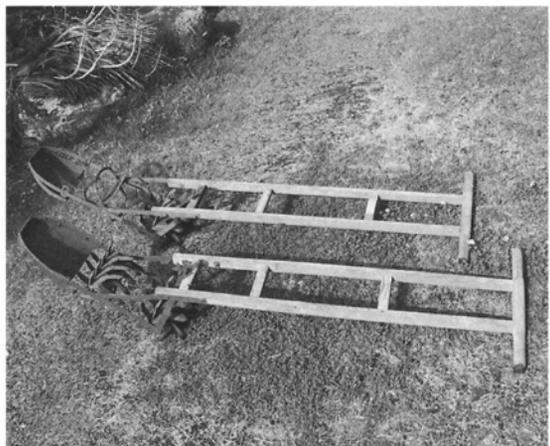
水田の除草は素手でとる代わりに「コロ」と呼ぶ回転式除草機が導入されたが、これも田の中を全部手で押しまわった。脱穀も足踏式脱穀機になったが、最後まで回転ドラムを足で踏み続けなければならなかった。

役牛を飼育して田畑の耕耘や運搬に使用する家もでてきたが、まだ多くなかった。

稲もみのもみすり、精米は農家にとって最後の重労働であった。手押し式のもみすり機、足踏式の臼による精米は農家の夜なべ仕事であった。後に動力農機具が普及して、仲間でもみすり機を購入して共同作業をするようになり能率が高まった。精米も農協で備え付けた電動式精米機を利用して便利になった。

しかし田植作業だけはどうしても手作業によらなければならなかった。

田植のあと農休みを決めたのも、きつい重労働を終えて、ゆっくりと休養をとるためでもあった。



回転式除草機（コロ）

多角的農業 農業は多米の主産業であり、その中心は米作りであったが、農家はいつも時代にあった商品作物や家畜を飼育して生計をたてていた。

明治初年には自給を主とした農作物を栽培していたが、生糸の輸出が増大するにつれて養蚕がさかんになった。畑は大部分が桑畑になり、野菜や雑穀の作付けは減少した。

第二次大戦が始まると食糧増産の時代となり、桑畑は姿を消しサツマイモ畑になった。

そのあと、多角的農業の波がおしよせてきて、果樹、園芸、家畜飼養の時代になった。

果樹では柿の栽培が増え、果樹組合もでき苗木購入、栽培指導、共同出荷に努めた。

園芸では温室やビニールハウスによる観葉植物、大葉などの栽培が始まった。

養鶏、養豚、酪農を経営する農家も増え、養豚は最盛期に子豚2,000頭、肉豚1,400頭の出荷をみるようになった。酪農組合は農協構内に集乳出荷場を設置して成果をあげた。

多米農協 多米農業協同組合のもとは大正2年(1913)にできた。資金の貸付や預金、農事・生計に必要な物資の購買など組合員の便宜をはかるためつくられた。当初組合員は108名、当時は15師団の馬糞取りが専らの事業であったので馬糞組合と言われたが、その後、信用・販売・購買のすべてを完備し発展してきた。そのため、養鶏組合の事務所を購入して寺門へ事務所を作った。

昭和21年、現在の場所へ事務所と倉庫を新築し、豊橋東部農業協同組合多米支所となって、多米の農業発展の中心的存在として力を発揮した。その後も事業が発展して、拡張の必要に迫られ昭和40年、新事務所を鉄筋コンクリート建に改築した。

今は豊橋農業協同組合多米支店となっているが、多米地区の農業離れの結果、その活動もおとろえてきている。

土地改良事業 多米は区画整理事業により大きく変わった。校区の地図を見ると中央部で南北に大きな違いがみられる。

北は市街化区域、南は調整区域となった。市街化区域には住宅が立ち並び、農業経営が困難となり農地も大きく減少してきた。東の山麓には豊川用水が通水しているが、この用水の恩恵もあまり受けていない。



コンバインによる刈りとり

調整区域となった南側では農業基盤の整理に務めてきた。豊川用水の通水に伴い、土地改良事業が進展した。葦毛では20ha、岩崎・多米では31haの水田が整備された。その西に続く岩田の土地改良とともに今は豊橋市北部土地改良区となり豊川用水を利用している。

この広大な農地では米づくりも大きく変わって、トラクターやコンバインなどの大型農機具が使用されて、効率的な農業経営が行われている。農家の中には委託栽培によって自家用の米を確保している人もいるが、一方で大規模な営農家も出てきている。

水田の中には温室が数棟建っているが、これは大葉栽培に取り組む専業農家である。

農業の変遷をまとめていて気になったことがある。あんなに田畑にしがみついていた食糧増産に励み、水の管理に苦慮してきた先人たちの日々、あれは一体何であったのだろうか。もう一度、原点にもどって考えてみたい。

(2) 商工業

^{よろずや}
万屋と行商 昔、多米には商店は2つしかなかった。農協の前の鈴木商店、もう一つは西の端、蟬川の鈴木商店であった。どちらも同じ鈴木商店であるが関係はない。調味料などを扱っていて、村人の利用も多かった。

そのほかに農協の購買部があった。農家の利用が多く、農協に用事で立ち寄ったついでに必要な物をここで買っていた。

今の人から見ると不便に思えるかもしれないが、必要な物以外は買わず、物を大事に使い、できるだけ自給しようと心がけていた時代である。不便だとは誰も思わなかった。

多米には行商人がよく回って来た。「羽根井の油屋」はすごかった。村の人から注文を受けたら、どんな物でも運んで来た。大きくて丈夫な自転車に何から何まで百を超す品物をつるしてやって来た。「トッピー」と呼んだ人は物々交換が専門だった。三ケ日からイグサのゴザを運んで来て米や卵などと交換していった。アイスキャンデー売りは自転車の後ろに氷箱をつけて、鐘をチリンチリンと鳴らして回って来た。衣料品の行商も来たり、鍛冶屋や修理屋も村を回って来て、家にも十分用事を足すことができた。



コンビニや飲食店

飲食店の増加 そんな多米にも、トンネルの開通と住宅の増加がその引き金となって、新しい商店が建ち並ぶ時がきた。

まっ先に商店ができたのは、主要地方道豊橋大知波線の沿線であり、柳原の住宅団地の周辺であった。

県道沿いの店舗を数えると、南側に29、北側に16、計45店舗に達している。

団地周辺の店舗は重複もあるが33になる。

多米の校区地図で、現在の商店などの分布を調べて見ると次の表のようになる。

町名	飲食店	喫茶店	酒食店	病院	薬局	理容店	美容院	その他
東町1	1	1		1				3
東町2	2							
東町3	1							1
中町1	2	1	2	2			3	3
中町2	9	2			1	3	2	4
中町3								
中町4	3	2	1	2		1	2	3
西町1	4	1		2	1		2	8
西町2	2	2	4					2
西町3	2		1		1			1
岩崎	1	1				1		2
計	27	10	8	7	3	5	9	24

これで見ると、多米に多いのは飲食店や喫茶店であり、日々の生活に身近な酒店、理容店や美容院が多い。病院や薬局も多くある。

その他では専門店は少なく、多種多様な商店がみられる。サービス業では新しい傾向として清掃業6、介護3と増えてきている。

しかし、時代の急激な変化の中で店舗の廃業も多くみられる。以前に名志苑という大きな庭園レストランができて観光バスもよく利用したが、今は住宅地になっている。

工業の発展 多米に初めて工場ができたのは明治36年（1903）、赤岩にできた山本製糸であるがもともと農村であるため、その後は、工業らしいものはなかった。

第二次大戦後、西町一丁目に守田光学、東栄建鉄、中町一丁目に東伸鑄造の工場ができた。区画整理が始まる少し前には、原絹綿の工場が字風木の水田の中に建設された。これは、豊川用水の工事現場から出た土で水田を埋めたもので、多米では本格的な工場となったが後に区画整理が始まると工場はなくなった。多米の工業の特徴としては、建設業と自動車関連の工場が多いことがあげられる。

町名	建築	土木	塗装	設計	板金・管工	電気	その他	計
東町1		2					1	3
東町2			1	1	2		1	5
東町3	2	1	1				1	5
中町1	1	1	1			1		4
中町2			1	1			2	4
中町3	1						1	2
中町4	1	2		1	1		1	6
西町1	3	2	1	2	2	1	1	12
西町2				1	2	2		5
西町3								
岩崎	4	4		1	2		2	13
計	12	12	5	7	9	4	10	59

これで見ると、西町一丁目、岩崎に多いことがわかる。全体的に小規模なものが多いが中には会社組織の大きな企業もみられる。

自動車の整備工場が多米には8工場ある。

岩崎の整備工場は解体工場である。

西町1	2	西町3	1	東町2	2
西町2	2	中町4	1	岩崎	1

岩崎の工場 岩崎には工場が多くある。それらの工場名をあげてみると次の表になる。

豊賀多米工場	東豊通信
中部ハーネス	中神建築
宝合成	マルエイライフ
山宮ゴム	丸利工業
神山鉄工	山下技研
野原組岩崎工場	丸弘機械
北谷建築	建 材
大 創	赤 岩 組

このうち葦毛には11工場あって、集中している。葦毛に工場が増えた理由として、早くから先駆者がいて、農業から工業に転換していたこと、広い工場用地があることなどがあげられる。

また、下請け工場として安定した経営をめざしているものもある。豊賀は東海理化グループの自動車部品工場であり、中部ハーネスも自動車部品工場である。



岩崎の工場

一方で、岩崎には多くの工場や会社の資材倉庫や資材置場がみられる。これも土地の有効活用の一つの方法であろう。

多米には多く見られるアパート、駐車場、貸店舗などと対比してみると、地域性があらわれている。

3 心をつなぐ校区の活動

校区諸行事は、年間計画に位置づけ実施されているが、すべて“豊かで、明るく住みよい校区”を実現するためのものである。

古くから、この地区に住む人々の知恵と工夫により積み上げられた土台の上に成り立つもので、今後にも力強くつなぐものである。

納涼祭 平成12年から納涼祭として実施されている。昔から夏の行事“盆踊り”として、その歴史は古い。

大戦後、昭和30年頃から町の青年団が中心となり、小学校の校庭（旧多米小）に“やぐら”を組み実施されてきた。ゆかた姿、下駄履き姿の老若男女が、団扇を帯にはさんで踊るのどかな風景の一夜の行事であった。総代会の記録によれば、昭和56年度に今の原型がつくられたようである。



当時は、練習日と本番の盆踊りであり、地域を分けたり、時期を変えたり工夫した。

昭和50年代以降、区画整理により地域住民の増大や各地より移住した人々との間でいろいろな問題があったようである。

地域により盆踊りの時期を変えるなどの対応が必要であったことも、その一つである。

平成10年より花火も加わり年々納涼祭的色彩が強くなり、現在の形となった。

体育祭 昭和56年に第1回校区体育祭が開かれた。一時運動会と呼ばれたが、昭和59年に

体育祭となり今日に至っている。

実施時期も当初10月であったが、昭和61年から9月実施となった。



ちなみに市民体育大会（全市の体育行事）は、昭和56年度は第31回大会で、10月実施である。これ以前校区民を対象とする体育大会はなく、校区民が小学校の運動会に進んで参加していた。

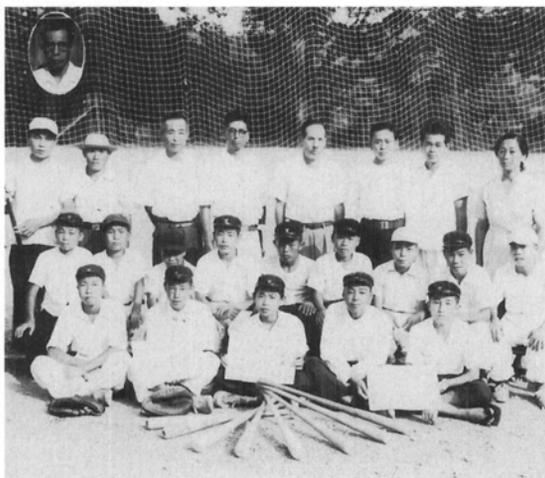
昭和59年以降の校区体育祭は、市民体育大会との関係が強まり、実施時期が早まった。

昭和60年市内水泳大会で優勝した記録もある。平成9年からスポーツフェスタと呼ばれるようになった。市民体育大会に関する特記事項は、“綱引き種目13連勝”の偉業である。平成4年度の初優勝から平成16年までの連勝である。



スポーツ活動 昔から多米ではスポーツ活動が盛んである。野球、卓球、バレーボール、ソフトボールなどの大会が盛んに行われた。

中でも子供会や青年団の野球はなかなか強く、対外試合で活躍した実績が残っている。



子供会は、昭和29年豊岡中学校総代会野球大会で優勝し、市の大会でも優勝した。

青年団は市の連絡協議会の野球大会で初優勝を飾った。



現在のスポーツ活動は、小中学校の体育館、校区市民館、地区市民館を活用し、多くの種目のサークル活動が盛んに行われている。小中学校の運動場、地区市民館グラウンドでも野球、サッカー、グラウンドゴルフなど子供から老人までスポーツを楽しんでいる。

平成16年度設立の「東陽いきいきスポーツクラブ」は、いつでも、どこでも、だれでも参加できる広域的スポーツクラブとして活動がはじまり今後の発展が期待されている。

地区市民館まつり 校区文化祭 東陽地区市

民館は、多米区画整理記念館として昭和59年3月に竣工した。

同年4月1日に市に移管され岩田地区市民館多米分館として開館した。その後、東陽中学校設立にあわせ東陽地区市民館として昭和63年に開館した。多米区画整理事業は昭和44年9月組合が設立、開始され、昭和58年9月末日工事が完了した。昭和60年3月完工の碑を記念館前に建立した。碑文には、その趣旨、事業内容と経過、意義と今後の願いなどが刻まれている。

東陽地区市民館まつりは、開館の年に始まり、毎年10月下旬に実施されている。当初から、市民館まつり・校区文化祭として実施され、作品の展示と芸能発表と共にスポーツも含めた文化活動である。中学生の作品展示から始まり、小学生の参加を加え、校区、地区市民館の活動中心の総合的祭典となった。

他に地区市民館では、各種の講座を開設し盛んな活動をしている。



平成17年度は、「ふれあい音楽会」を開設し、生の音楽にふれる手づくりの会として校区内外の参加者が多く人気度が高い。

校区市民館は、小学生の読書活動の外に平成16年度から「いきいき子育て講座」を開設し、紙芝居・読み聞かせ・手芸等を小学生対象に実施し子育てに資している。

多米校区は、豊かな自然に恵まれており、明るく豊かな町づくりを目指す中、心豊かな

生活の実現を求める文化活動が盛んである。
文化協会 昭和35年多米小学校跡に設置された民俗資料収蔵室の管理の問題があり、市当局と協議の結果、校区文化協会を設立し民俗資料収蔵室の管理にあたることにした。

当初は総代が兼務していた。その後文化協会は、それぞれの分野の活動母体を統合した文化協会として今日に至っている。

東陽地区市民館では、華道、踊り、カラオケなど21サークル、240名。校区市民館においてもカラオケ、踊り、華道など76人が利用し活動している。

これら文化活動の発表の場として、校区文化祭が開催されている。

10月下旬、東陽地区市民館を会場にした展覧会・芸能発表会等の行事である。

この他に平成14年から校区芸能発表会も行われ、4回目を迎えた。



各サークルのリーダーは、楽しく魅力ある活動で、多くの人々の参加を呼びかける。

文化協会の役員は、サークル活動の発表の場を多く設け、その連絡調整をはかる。

このことにより、校区の文化活動の活発化も進めようとしている。

今後、校区文化活動は、スポーツ・文芸・芸能などの調和の取れた活動が盛んになって文化の香り高い町となることが目標である。

敬老会 敬老会の歴史は古く青年団が主催していたと言われるが、記録は現存しない。

戦後、敬老の日が国民の祝日として制定されたころから続けられてきたと思われる。

昭和59年から、多米校区としての敬老会が公民館で実施された。昭和60年からは、敬老会名簿があり明確である。



校区全体の敬老会はそれ以後今日まで継続して実施されている。現在では75歳以上の方を招待して敬老会を実施しているが、530名を突破したので校区全体での開催がむづかしくなってきた。

今では小学校体育館で実施されているが、平成9年以前は公民館で行われていた。内容は、式典と文化協会員の余興である。

茶菓、祝菓、料理も用意され、「いつまでもお元気で」の前看板と紅白の幔幕に囲まれた会場で、楽しい一時を和やかに過ごしている。

小学生のお祝いのことばや手紙の励まし、中学生の和太鼓の演奏も用意されている。

今高齢化社会は急速に進んでおり、会場の関係でどこまで続けられるかわからないが、伝統的な行事であるので、今後も敬老の意をなんらかの形で表して行きたい。

招魂祭 大正12年(1923)に旧多米小学校西側に忠魂碑が建立された。村の在郷軍人及び役員が発案である。それ以後欠かすことなく招魂祭を開催してきた。

日清戦争・日露戦争の戦没者、後に満州事

変、日中戦争の戦死者、更に第二次世界大戦の霊を安んずるためである。

ちなみに、昭和12年までの戦没者は7柱で、昭和14年のノモンハン事件（対ソ蒙古戦）戦没者3柱、昭和17年以後の戦没者67柱、計77柱である。（平成17年戦没者名簿）

このように、圧倒的に多くの戦没者は、第二次世界大戦（大東亜戦争）である。

豊川海軍工廠における若年戦没者（7柱）が含まれ、学徒動員による犠牲者もいる。

招魂祭のほかに、毎年8月16日戦没者慰霊祭が開かれていた。

戦後60年を迎え、平成16年からこの慰霊祭を取りやめ招魂祭に一本化して戦没者の招魂をすることとした。

戦争後の平和で豊かな日本、大変恵まれた私達の生活は多くの戦没者及び一般の犠牲者の上に成り立っていると言っても過言ではな



忠魂碑



出征兵士も登台挨拶した7つ石

い。その意味で二度と再び戦争を起こさないことを誓う「平和を誓う会」として存続する招魂祭でありたいと強く思う。

成人式 戦後日本は民主主義の国として生まれ変わり、国民主権の国づくりが行われた。

成人の日が、国民の祝日として新設された。

満20歳を記念しての式典で、社会人として祝福する会である。



平成16年度多米校区成人式

直接的には、新成人に参政権が与えられ、国民の一人として自由と平等の権利が得られると同時にその責任と義務を負うと言う重大な意味がある。

成人として社会に仲間入りする自覚は勿論、夢と希望に充ちた出発の日でもある。

校区の成人式が始まった頃、新成人者は少人数で小学校の旧校舎の教室を兼ねた講堂で実施された。

区画整理後の人口増加に伴ない次第に新成人者が増えてきた。

地区市民館二階の大広間（体育館）でも実施されたが、平成4年から小学校体育館で開催され現在に至っている。式典内容は祝辞、成人の誓い、記念品贈呈などで約1時間程度である。その後、小中学校の恩師を囲んでの懇親会が約1時間程度で、若き成人者の集いははなやかにその懇親は希望に充ち頼もしい。

健全育成会 地域社会の発展の基は、健全な青少年を育むことにある。国の発展もまた然りである。

すこやかな子ども達を育てる会は古くから父母の会として地道な活動があった。

子ども達を守る会であると共に育てる会でもある。青少年の健全育成会が設立され活動を始めたのは昭和50年代で中学校の日常生活に問題行動（今までにない行動）が表出した時期と重なる。

小学校の健全育成会発足は中学校より遅れる。これも問題行動の低年齢化の拡がり時期を同じくする。

多米小学校の健全育成会の設立は平成4年度でこの年全市の健全育成会の組織が確立した。

この年小学校では「環境教育」の研究指定を受け、研究発表を行った。研究内容は、「自然と人間の共生」を中心に「自然の理解と現実を通して、人はどのように対応したらよいか」を考える学習を展開していた。

当時環境問題は現今のように容認されていなかった。むしろ、環境問題と言えばゴミ問題として処理され、人は自然の中で生きてゆく、自然が人の健康に大きく関与することは解っていても大きな発言はできなかった。産業優先の社会で環境問題はタブーの状況であった。しかし、この問題を子ども達と学ぶことを中心に自然にふれる機会を多くし、子ども達の目を自然に向け、その感性を育てる活動を展開した。



ふれあい9000

その結果、子ども達の活動は目をみはるほど活発になった。郷土の自然や文化を知る活動のひとつとして、親子で校区を歩き自然にふれる活動（ウォークラリー）も実施した。この年校区でも地区市民館の活動としてウォークラリーが行われた。

翌平成5年健全育成会の行事として全校区民参加の「ふれあい9000」が実施された。その後数年この活動が実施された。この活動を通して父母を含めて環境に対する意識が盛り上がった。そしてこのことが健やかな子どもの育成に大きく寄与した。現在PTAを中心とする「多米おやじの会」が発足し、子ども達のためにおやじは何ができるかを考え、交流友好から子ども達を取り込んだ活動を展開している。



手洗から見た多米

平成16年度は、「山の上から多米を見る」会が開かれた。赤岩山自然歩道の設置に合わせて、多米峠から校区北側の山の尾根を歩く活動で、眼下に広がる校区の街が一望され、新たな発見と共に親子のふれあい、人との交り、友好の目的が達成されたようである。

この活動には、食事会、地震体験などもあり、外国人親子の参加も見られた。環境教育に端を発した活動が健全育成の活動に拡大され、子ども達の活動からPTA（親子）を取りこみ、校区全体とした活動に進展し特筆すべきものである。

環境美化運動 校区における530運動は発祥の地豊橋市の運動と共に古い。春と秋の530活動にとどまらず、月1回の自主活動から日常活動まで進化した地域もあり、街の中が清潔になったようである。

地区内には朝倉川が流れている。区画整理に合わせ、川の両岸に植えた桜が時を経てみごとな並木となった。これに合わせるかのように、朝倉川育水フォーラムというボランティア団体が530活動を始めて、8回目を迎えた。第1回のゴミ等の量は膨大で唾然としたようである。その後年々減少し、現在は少なくなったという記録がある。

平成2年から数年間、小学校北の朝倉川にコイの放流も行われ、次第にきれいな川が帰ってきた。



朝倉川530運動

今、世界的に環境問題は重大なこととして取りあげられている。その内容は、大気汚染、水質汚濁、気候の温暖化、酸性雨、オゾンホール拡大、地球の砂漠化、森林の荒廃等と数えきれないほどである。人と自然の共生を求める運動は、次世代の人間がこの地球上で生きてゆくために、必要不可欠な重大問題である。今、私たちに求められる環境に対する基本的な考え方は、「シンクグローバル・アクトローカリー」（広く考え、身近な行動で実践する）と言う地道な積みあげであろう。

防犯パトロール 近年、治安の悪化がひどく、町内及び校区内の防犯パトロールの必要が生じている。自動車に青色の回転灯を積んだパトロール活動を開始した。この活動で校区内の安全が確保され、意識が高まることを願いたい。交通安全に対する取り組みも、長年継続したい活動である。

防火活動は、消防団17名の主活動である。歴史と伝統のもと、自覚と責任感、誇りを持った団員が家庭の理解にささえられ献身的に活動している。家庭の防火意識と団員の活動が安全の要である。

民生委員、児童委員は、高齢化のすすむ社会にあって認知症、独居老人等の対応、家庭の弱体化による家庭内暴力、児童虐待、登校拒否児童対応と幅広い活動が要求される社会となった。平成16・17年にはモデル民生委員、児童委員協議会より指定を受け研究的に取り組みを実践した。その活動と成果は高く評価される。この実践を基として、これからますます増大する老人問題と児童問題への対応で真価を発揮することが期待される。

豊橋100祭 豊橋市は、平成18年に市制施行100周年を迎える。市の行事と共に、地域も「地域イベント」として、色々な活動を行うこととなる。

校区も記念事業として、校区史の編集発行と校区花いっぱい運動を中心とする活動を行う。100周年記念植樹として、校区内の公有地を始め各家庭にも合わせて400本余の花木を植樹した。5年、10年後この花木に花が咲き、花いっぱいとなれば名実ともに美しい多米校区になることを期待したい。

校区地図に校区の花情報を「花マップ」としてまとめ全世帯運動にしたい。

人の和と美しい町、豊かで明るい安全安心の町づくり。この命題は、「心をつなぐ人の和」として、大切に育てたいことなのである。

第3章 教育と文化

1 学校教育

(1) 小学校教育

庶民の学校 江戸時代から明治5年(1872)に学制が施行されるまでの庶民の教育機関は“寺子屋”であった。

これは、近隣の子どもたちを集めて、日常生活に必要な読み・書き・算盤そろばんなどを教える簡易な学校と言えよう。

多米校区には、法言寺(現赤岩寺)・宝珠寺・歓喜院・龍岩院に寺子屋があり、その多くは江戸時代に開設されたものである。

教える人を師匠、学ぶ子弟を寺子とか筆子と呼んでいた。多米校区の寺子屋の師匠は各寺院の僧侶がこれにあっていた。

明治6年、新しい制度の学校を作るために寺子屋は廃止されることになった。

学制 従来の制度では、武家の藩校と庶民の寺子屋の二系統になっていた。

明治5年、に学制が制定された
「邑むらに不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す」「人の父兄たるもの其子弟をして必ず学に従事せしむべし」

この教育改革の大方針のもとに全国民を対象にした新しい学校制度である。

日本全国を8大学区に区分し、一大学区を32中学区、一中学区を210小学区とし、小学区毎に小学校の設置が決められた。

多米学校の創立 明治7年(1874)1月に第9中学区内第42番小学牛川学校出張所多米学校が、宝珠寺本堂を仮校舎として開設された。出張所はいまで言えば分校にあたる。

この時が“多米学校”の創立であり、多米村・赤岩村に初めて学校が誕生したのである。**幾多の変遷** 所在地は宝珠寺仮校舎から畑ヶ田・滝ノ谷・深田へと移った。その主な理由は、児童数の増加により、教室が不足したが、校舎増築のための余地が無く、新しい校地に移ったのである。

校名は、寺子屋から牛川学校多米学校から多米尋常小学校・多米国民学校・多米小学校と変わっている。それは、時代背景や国の学校制度の変更によるものである。

昭和19年(1944)に建設された多米小学校は、豊橋市民俗資料収蔵室として活用され、豊橋市に残る唯一の木造建築の校舎として今も残っている。

岩崎との関わり 多米校区に編入するまでの関わりは下表のようになる。

年	岩崎の児童	摘要
明治 26	岩田小学校へ通学 遠距離で不便 多米小に依託する	岩崎は渥美郡 上岩崎・手洗の児童 多米は八名郡
39	多米依託児童 岩田小への通学	岩崎は豊橋市と合併 多米は八名郡
40	岩崎分校設立 1年～4年が分校 5年以上本校へ	岩崎町民の運動 本郷集会所で開設 後に校舎を建設
昭和 17	分校廃止	本校通学となる
51	多米小へ通学となる	岩崎・多米両町民 の総意による

校舎新築移転 昭和51年現在地に校舎を新築移転し、岩崎町の編入とともに新しい多米小学校が誕生したのである。

(2) 中学校教育

高等科と中等教育 尋常科から上級学校への志望者が増加し、高等科へ進学する者も増加した。また、中等教育（豊橋中学・私立商業・市立高等女学校など）を受験しようとする者も増えてきた。

これらには尋常科6年から受験することができたが多くは高等科から受験して進学する者が多かった。

新教育制度 昭和22年6・3制の新しい教育制度が発足したことにより、義務教育の新制中学がおかれた。

終戦直後のことであり、校舎建築に対して国の補助がなく、独立した校舎を確保できないことが多かった。

東部中学校 昭和22年、豊橋市向山町中畑の工兵隊跡（現県立豊橋商業高校）に本部を置き、東田教場（現旭小学校）、向山教場（現豊橋東高校）、岩田教場（岩田小学校）、などで、東田・岩田・多米の各小学校を校区として発足した。

青陵中学校 昭和23年には、東部中学校は、北部第二中学校（牛川・下条校区）と統合して、旧愛知県豊橋第二中学校を校舎として、学校名を青陵中学校と変更した。

多米小学校の児童はこれで二つ目の中学校に通学することになった。

豊岡中学校 仮称東部中学校として、田尻の八幡神社の境内地を中心とした地域に校舎の建設が始まり、昭和25年4月“豊岡中学校”として開校した。

東部中学校に通学するようになってからの3年間は毎年のように生徒たちは引越し作業に追われたことになる。

東陽中学校 およそ40年間、多米校区の生徒は豊岡中学校に通学したが、学校規模適正化のために昭和63年4月に多米小学校校区と北岩田・東岩田を校区として“東陽中学校”が開校した。

多米校区は、新制中学校発足当時の東部中学校、青陵中学校、豊岡中学校、東陽中学校と中学校区の変遷を辿ってきた。



豊橋市立東陽中学校

(3) 幼児教育

農繁期託児所 昭和16年から昭和20年にかけて、農繁期（田植えの時期）に農繁期休業中の学校において開設された。

この託児所は、多米校区の仏教会が中心となって、約一週間開設された。

預かる子どもは幼児から小学校低学年の児童を対象とした。

東部保育園 昭和28年4月に赤岩寺の庫裏を改造して、これを園舎として開園した。

昭和39年に、鉄骨にて近代的な園舎を建設し、社会福祉事業として幼児の保育に専念し、発展を続けている。

仔羊幼稚園 昭和28年に八町通りの豊橋ハリストス正教会を借りて誕生した。

発足当時は馬車で送迎をした。

昭和40年に自然環境に恵まれた現在地に園舎を新築して移転した。時代に合った幼児教育を目指して日夜努力している。

ゆめの子幼稚園 石巻山多米県立自然公園(昭和44年指定)の弓張山系の山麓にあり、葦毛湿原など自然環境に恵まれた現在地に昭和51年4月に開園した。

健康的な身体と情操豊かな明るい子を育成しようと日々努力を続けている。

(4) その他

岩崎学園 昭和28年に知的障害を持つ児童の福祉施設として、当初定員30名で豊橋市岩崎町に開園した。

この学園の初代理事長である松下忠男氏が私財を投じて知的障害を持つ子や身寄りの無い子供たちのユートピアにしようという願いからスタートした。

「岩崎通勤寮」を昭和47年に開設するなどして、各種の障害児(者)の地域療育等支援事業を行っている。

高山学園 昭和35年5月に豊橋市飯村町高山に知的障害を持つ子の通園施設として開園した。

昭和46年木造の施設の老朽化と入園児の状況から、敷地の広い多米町野中の旧老人ホーム跡へ園舎を新築移転した。

遊びや行事を通じて幅広い療育と個々の園児発展向上を図っている。

2 社会教育

男子青年団 明治30年、「多米青年夜学会」として発足したのが始まりである。

その後、「青年会」と改称した。

明治時代は、模範的農業を目指して稲作の研究などに活躍した。

昭和21年に「豊橋市岩多青年団多米分団」として新発足し、農産物の作付け指導や品評会を開催して農業発展のために活躍した。

女子青年団 大正11年「八名郡処女会」とし

て創立されている。

多米でもこの時期に創立されたと思われるがはっきりとした記録がない。

昭和20年に、「多米女子青年団」として発足し、この年初めて敬老会を開催したという記録がある。この時男子青年団はアトラクションで応援をしたという。

多米青年団 昭和26年に男女青年団が合併して新しい「多米青年団」が誕生した。

戦後新発足してから、青年団が中心となって敬老会を行ってきた。

昭和30年に岩多青年団より独立して「豊橋市多米青年団」となった。

昭和41年、多年にわたり敬老事業に貢献したので、豊橋市長より感謝状を受けた。

校区親睦旅行 当初は各町各種役員の懇親親睦を図ろうと始まった。

昭和56年から多米校区社会教育委員会が中心となって計画し、全校区民に参加を呼びかけて、観光バスによる日帰りで親睦旅行を毎年秋に実施している。

子ども会 大正5年に赤岩寺・歓喜院・宝珠寺の住職によって創立されたのが始まりである。

昭和25年多米町に委嘱して校区単位となり、豊橋市の子ども会連絡協議会に所属するようになった。

昭和30年代には、現在のような少年野球のチームがなく、子ども会が中心となってチームを編成し、中学校校区・市の大会に参加し、優秀な成績をおさめ子供会役員の熱心な指導により目覚ましい活躍をしていた。

現在は、校区を6ブロックに分けて各種の活動を行っている。

ナトコ映画会 昭和30年代、今のようにテレビが一般家庭に普及していない時代に校区を巡回する映画会が行われた。

これが町民の娯楽の一つとして、大きな役

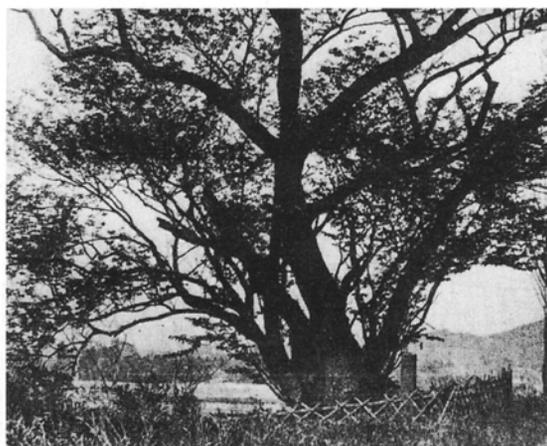
割を果たしていたのである。

3 史跡・文化財

豊橋の史跡と文化財（豊橋教育委員会発行）に収録されているものを中心に取り上げた。

駒止めの桜 けんきめう 建久年間に、源頼朝が都（京都）へ行く途中に、この地を通り、この桜に軍馬をつなぎ、当地の氏神の‘鞍馬大明神’（現在の鞍掛神社）に鞍を奉納して、武運長久を祈願したと伝えられている。

現在のサクラは往時を偲んで植えられたものである。



駒止の桜（明治33年）「ふるさとの思い出118」より
戸田宣光石碑 江戸時代11代150年以上に亘り、松本城主を務めた戸田氏の祖・宣光は二連木城を居城とし、岩崎村に没したと伝えられている。

田畑の中に篠竹と生垣に囲まれ、「丹波入道惟馨全香墳跡」の碑銘と宣光の略歴を記したこの塚は最後の松本城主・光則が嘉永2年（1849）に当地に建立した。

多米不動滝 たみふどうたき 多米峠の豊橋側から登り口最初の右カーブの手前左手にあり、落差4m程の滝である。興教大師作と伝えられる「滝不動尊」が佇む。

葦毛湿原 いもつしげん 湿原の成因となる湖沼・河川・平

地・海岸の何れにも属さない特殊な湿原である。標高75mにも関わらず高山植物が自生する湿原である。山腹斜面からの湧き水の浸透を妨げる岩盤上に堆積した強酸性・貧栄養の僅かな土壌が湿潤となって保たれている独特の中間湿原である。

昭和62年豊橋市天然記念物に、平成4年には、愛知県天然記念物に指定された。

多米峠 愛知・静岡両県の県境、弓張山系の標高265mの峠。古来から三河・遠江両国を結ぶ道路の峠の一つである。

蟬川七つ石 せみがわ げんろく おきてまい 元禄期多米から吉田城へ掬米（年貢米）を背負って運んで納入していた。

吉田下町士族藤井（次太夫）栄作が、途中の、休憩場にと雲谷から石を運搬して据え付けたと伝えられている。

西町一丁目の東海算盤教室の裏手辺りの旧道にあったものを、現在はJA豊橋多米支店東隣の道路沿いに復元されている。

昭和20年迄は、多米町の出征兵士の見送りの終点であり、この石の上で挨拶をした。また、戦没者の遺骨迎いの起点でもあった。



蟬川大松と七つ石

豊橋市民俗資料収蔵室 多米小学校の旧校舎で、昭和19年に建築されたものである。

豊橋市の民俗資料収蔵室として利用されている。昔の養蚕・農耕・漁業・林業などの道具や生活用品が展示されている。

毎週土・日曜日に一般公開されている。

なお、収蔵室として活用されている校舎は豊橋市で唯一残っている木造校舎である。

映画「早咲きの花」の撮影にも登場した。
愛染明王坐像 おうぜんみょうおうぎざう 昭和3年に、国の重要文化財に指定された。赤岩寺蔵。

鎌倉末期の作と伝えられ、愛染堂の本尊として安置されている仏像。三眼^{みつめ}六臂^{ろくべ}、頭に獅子の冠をのせた高さ1m程の木像。

像の体内に愛染明王の小さな木像百四体と修理に関する文書が収められている。

何時の間にか男女の仲を取り持つ縁結びの仏として信仰されてきた。

また、愛染が藍染につながることから染物業者の信仰も篤かった。



愛染明王坐像「とよはしかるた」より

阿弥陀三尊種子 あみださんぞんしゆし 市指定文化財。

縦120cm、横37cmの布の中央に阿弥陀・観世音・勢至といった女性の毛髪で刺繍された梵字が描かれている。

上部に藤の花、下部に香炉と花瓶を置く机、額縁様の花飾りの刺繍など鎌倉期の優れた美術工芸品である。

聖観音立像 しょうかんのんりつざう 市指定文化財。赤岩寺蔵。

像の全長1m、塗料も剥がれ、金箔もわずかに残るのみであるが、温和で気品に満ちた藤原期の名作である。

なお、これらの文化財は、毎年11月の勤労

感謝の日頃、寺宝展で公開されている。

寺宝展は2日間行われ、拝観は有料である。

4 多米の巨木名木

春日神社のイヌマキ

幹周3.43m・高さ16.8m

推定樹齢400年以上

春日神社の御神木であり、他に2本の巨木がある。イヌマキは中世時代ある針葉樹で海岸部に多く、防風林として利用されている。熟した赤い実は食べられる。雌雄異株。

昭和42年2月17日市の天然記念物に指定された。

(追記)「愛知の巨木(風媒社)」に〈後補〉として、春日神社の実測幹周3.33m、推定樹齢400年以上という大楨を見落としていたとある。

多米小学校のイチイガシ

幹周3.3m・高さ12.0m

推定樹齢200年以上

本市では最も太く学校のシンボルになっている。昭和53年に、校舎新築移転記念樹として、三河大塚の山を降りて、この地にやってきた。



多米小イチイガシ

民俗資料収蔵室のクスノキ

幹周3.04m・高さ15.4m

推定樹齢 100年以上

本市のクスノキの中では太く、多米小学校の旧敷地にある。地域のシンボルでもあり樹形も美しい。

龍岩院のスタジイ

幹周4.87m・高さ16.0m

推定樹齢 300年以上

本市のスタジイの中では最も太い。古くて風格がある。

5 神社・寺院

5～7の項目については「とよおか誌（豊岡中発行）」などを参考にした。

春日神社 かすがじんじや 社伝によれば、崇峻天皇 すしのんてんのう（第32代・没年592年）の時代に、徳合長者という者がこの地に住み、社を創建したのが起源だとされている。

源平の乱の頃この長者の家は滅びたが、建武年中、鷲尾三郎時助が乱を避けて西三河より来てこの地に住んで篤く本社を崇敬した。

室町時代（1336～1573）の頃、この地は藤原氏の所領となる。その氏神様であった春日明神を主神として、村内にあった七社を合祀して八柱（八社・八所）大明神と改めた。

春日・鹿島・祇園・波利・白鳥・大社・稲荷・雷公の八宮一社と伝えられている。

鞍掛神社 くらかけじんじや もとは、現在地南の米山 よねやま に祀られていた米山大明神（鞍馬大明神）が、文治4年（1188）に今の地に移転した。

源頼朝が上洛する途中にこの地を通り、乗馬して来た馬の鞍を奉納して武運長久を祈願したことから、それ以来「鞍掛神社」と改めたと伝えられている。

吉田城主松平主殿忠利が社地として、年貢免除3石の黒印状を授け、黒印地が認められた格式の高い神社である。

日吉神社 ひよしじんじや この神社名は、明治になって神社制度改正にあたって、村社に列せられたこと

に始まる。それ以前の社名はよくわからないが、古来、山王権現または山王十一社として、朝廷 そんすう の尊崇が篤かった。

聖武天皇 しょうむてんのう（第45代）の時代に僧行基がこの地に来た時、船形山に寺院を建立しようとしたが、悪鬼神がいて障害をするために、身体を清水で沐浴して清め、悪鬼神を結界して、山林の守護神と尊崇したことに始まると伝えられている。

赤岩寺 せきがんじ 元は赤岩山法言寺といい、僧行基が聖武天皇 しょうむてんのう（第45代）の勅願によって開いたと伝えられている。一時、寺運が衰退した時期もあったが、天安3年 てんあん（859）に弘法大師 こうりゃん の高弟である杲隣が再興した。

真言宗勅願寺として高野山明王院の末寺となり、一山十二坊を擁する大きな寺となった。

鎌倉期には、三河国の七つの有力な寺の一つとなり、「三河七御堂」として篤い保護を受けた。

庶民の信仰が再び盛んになってきた時、図らずも大正2年（1913）火災により本堂・山門・愛宕権現 あたごこんげん を残して一山の多くの伽藍を焼失したが、多数の仏像等の寺宝は難を免れることができた。

歓喜院 かんぎいん 飛鳥朝時代 あすかちょうじだい（593～710）、多米の徳合長者が創建した滝山の六坊舎六院中の隋一で、多米村滝の谷にあった真言宗の寺であると伝えられている。



歓喜院の山門

享永11年東海義易禪師が来て、類廃無住となっていた寺を再興し、曹洞宗に改宗した。

東海義易禪師は北条氏隆の3男で、母は多米村の尾崎氏の娘といわれている。

宝珠寺 ほうしゅうじ てんしやう 天正年間(1573~92)に、龍拈十世、安国巖盛和尚が創開し、寺伝によれば、初め多米村字南脇の内炮六郷と称する山腹にあったのを後世今の地に移転したといわれるが、その年代は不明である。

本尊について知るところがない。

明治7年(1874)当寺に牛川学校出張所が設けられ、同9年(1876)独立して、多米学校となった。

校舎が建設されて移転するまでは当寺の本堂が仮校舎として使用された。

龍岩院 りゅうが いん てんぶん 当寺は、天文元年(1532)龍拈寺四世休屋宗官和尚によって開山された。

当寺に残されている過去帳の初めに「岩松久柏」があるが、これは小柳津久柏の戒名である。「松月山龍岩院」のうちの2文字までも戒名にいただく小柳津久柏と龍岩院との結びつきは相当なものであったと思われる。



龍岩院

当寺の寺子屋は文政年間に道元和尚によって開かれ、大休師、春峰師の3代にわたって継続された。

6 人物と伝説

徳合長者 とくごうちやうじや 長者についての記述は、天明3年(1783)に、歡喜院五世悦法和尚が言い伝えをもとに書いた「滝不動縁起」に、載っているにすぎない。

徳合長者は滝ノ谷に住み徳合長者と名乗っていた。すしゅんでんのう 崇峻天皇(第32代)の頃、河内の国で聖徳太子の説法を聞いて、「徳合長者」という名を賜った。

その時に、聖徳太子の御作の大日如来を戴いて多米に帰ってきた。

戸田左門 とだ さもん 多米の戸田左門一西は、戦国時代、三河の地で勢力を伸ばし、新興してきた田原の基礎を築いたという戸田宗光の流れをくむ者であり、大垣戸田の祖であって、天文・文禄てんぶん ぶんの頃から元龜・天正げんき てんしやうのころまで吉田付近に住し、多米・赤岩・神郷・金田の地を領有していたことは、相違ないといわれている。

松下忠男 大正6年豊橋市岩崎町に生まれた。昭和12年(1937)に東京鉄道局勤務をはじめ、名古屋鉄道局など勤務した。昭和40年(1965)に豊橋駅長となる。同43年(1968)日本国有鉄道(現JR)を退職した。

昭和28年(1953)に自宅と土地を提供して精神薄弱児を収容する社会福祉法人岩崎学園を開園し、初代理事長に就任した。

平成13年(2001)まで、児童発達支援センター「岩崎学園」、自立支援センター「岩崎通勤寮」、グループホーム「スイートビレッジ」の経営に携わった。

平成13年12月14日没した。

米山伝説 岩崎では「よねやま」、多米は「こめやま」と言っている。

源頼朝が岩崎の砦にたてこもって戦をした時、敵に水断ちをされ困ってしまい、徳合長者に無心して白米3俵程分けてもらった。

それで朝日のさす中で馬を洗った。それを

見た敵軍は苦勞が水の泡と思ひ込み、水断ちの攻めを止めたという伝説である。

宝珠寺の子守地蔵 大知波の百姓が泊めてもらった地蔵堂のお地蔵様のお告げで、生まれた男の子が15歳になった時の願いで伊勢参りに団子を持たせて行かせた。

吉田大橋で女の人と出会い一緒に伊勢参りをして、出会った所に戻って来ると、「私はこの川に住む竜。伊勢参りに行って来ることができたお礼に寿命を延ばしてあげよう。」と言って川の中に消えた。

百姓夫婦と若者は団子を供えて毎年お参りをした。生まれる子が健康で長生きするように願ったことから「子守地蔵」と言うようになった。

7 風俗と信仰

庚申信仰 こうしんしんこう げんろう 元禄時代より田の守り神として、申の日にお祭りをした。

庚申仲間（氏族または部落）があり、お祭りは仲間の家で順番に行っていた。平年は6回、閏年には8回勤めた。現在では、稲作をしない家庭もあるので、休止または年1回お祭りを行っている状態である。

秋葉信仰 あきばしんこう 庚申仲間のように仲間があって、代表者が代参してお札を受けて来てお祭りをする。現在では、町内で取り纏めてお札を受け、庚申様と一緒に参りするよう簡素化されて行われているのが現状である。

観音信仰 かんのんしんこう 赤岩山本堂裏に弘法大師が修行した八十八カ所の霊場の御本尊の石仏が安置されている。現在でも旧暦3月21日に供養が行われている。

山の神 山の仕事をする人のために山に入る前に、無事を祈って部落に一番近い山の麓の大木などに御神酒を捧げてお祈りをしてから山に入る習わしである。現在では山の仕事も

少なくなり関心も薄れてきた。

節分 節分の日には、柊の枝と大豆の幹を5寸位に切ったものに鯛の頭か煮干しの頭をさし、家の入口にさした。現今では見かけなくなってきた。

盆踊り 昭和初期の頃の盆踊りは、寺院の庭で和尚の指導で、団扇だけを持って有志のみが集まって踊った。昭和30年代以降になって、青年団・婦人会が中心となって、子供たちも参加して行われるようになった。

現在では、校区納涼祭として行われ、近年では花火（手筒・打ち上げ）も行われている。



納涼祭手筒花火

正月の餅つき 12月29日には各家庭では餅をつかないことになっている。9が苦に繋がることから縁起が良くないことによると思われる。

辻堂の施餓鬼 つじどう せがき 新仏の成仏を祈願する行事である。毎年8月16日の夕方行われ、初盆の家庭の人が宗派を問わずお参りをする。

雨乞い あまご 現在では行われていない。

水源が滝の谷池の水だけであったので、水不足で作物が枯れ死するような状態になった時、村中の家から1人ずつ出て神社や寺院で御祈祷して降雨を待つ行事である。

虫送り 現在では行われていない。

明治時代に稲穂の出る頃、村中総出で各自作った松明をともし、音の出るものを先頭にして行進し、ウンカやニカメイチュウを退治する行事である。

校区のあゆみ 多米 年表

8万年前		牛川人骨発見（昭和32）
8千万年前		嵩山蛇穴遺跡縄文時代早期
350頃		多米部…多米の地を支配
6～7世紀		多米古墳群 古墳時代後期
6世紀末		徳合長者の伝説（滝の谷）
701	大宝1	大宝令制度 多米…八名郡
713	和銅6	平城京出土木簡八名郡多米里
726	神亀3	行基 赤岩寺開創
1188	文治4	鞍掛神社 米山より移転
1190	建久1	源頼朝上洛、鞍掛神社に奉納
1439	永享11	歓喜院再興 東海義益
1499	明応8	船形山合戦 多米又三郎
1505	永正2	藤原家次吉次の棟札 春日神社
1515	12	多米元興 本願寺建立
1532	天文元	龍岩院開山
1568	永禄11	赤岩城主 戸田佐門介棟札
1573	天正年間	宝珠寺開創
1608	慶長13	小柳津久柏 龍岩院過去帳
1629	寛永6	寛永の検地
1667	寛文7	平川新田の開発
1669	寛文9	岩崎村と田尻村の山論
1675	延宝3	岩崎村 上岩崎・下岩崎分離
1695	元禄8	春日神社 八社を合祀
1783	天明3	滝不動縁起 歓喜院法悦和尚
1849	嘉永2	松本城主 戸田宣光碑 建立
1872	明治5	学制公布
1873	6	地租改正 寺子屋廃止の布達
1874	7	多米学校創立
1877	10	八名郡85番小学多米学校
1878	11	多米村・赤岩村合併 手洗村、上下岩崎村→岩田村
1879	12	八名郡36番小学多米学校
1880	13	字畑ヶ田に校舎新築移転
1882	15	八名郡33学区公立小学多米学校
1884	17	手洗村・上岩崎村は岩崎村に

1888	明治21	多米尋常小学校 美米村 多米村三輪村合併
1889	22	豊橋町誕生 岩崎村豊岡村
1892	25	美米村分村・多米村
1893	26	岩崎児童 多米小学校へ委託
1895	28	豊橋村と豊橋町の合併
1901	34	滝ノ谷校舎開校式
1903	36	多米尋常高等小学校
1905	38	赤岩に山本製糸工場
1906	39	豊橋市制施行
1907	40	岩田小学校岩崎分校～1942
1909	42	多米尋常小学校
1913	大正2	赤岩寺焼失
1915	4	石巻村第一消防組
1916	5	多米子供会創立 仏教会
1919	8	多米農業補習学校開設
1923	12	忠魂碑完成
1925	14	市内電車全線開通 多米 電灯点灯式
1927	昭和2	上水道起工式 30竣工式
1928	3	赤岩寺愛染明王坐像重文指定
1932	7	隣接町村合併 多米・豊橋市に
1935	10	電話開通（多米小番号4086）
1936	11	多米農業補習学校廃校 二宮尊徳除幕式
1941	16	太平洋戦争開戦 多米国民学校 農繁期託児所開設
1942	17	裏山開墾 食糧管理法 岩崎分校 廃止
1943	18	防空壕作成（5.6年児童） 金属製品の特別回収
1944	19	多米国民学校 校舎改築 鐘楼供出 市内各寺院 サイパン島玉砕 本土空襲

1944	昭和19	東南海地震
1945	20	大東亜戦争必勝祈願祭 三河地震 豊橋大空襲 終戦 8/15
1946	21	豊橋市東部消防団多米分団
1947	22	新制東部中学校 6・3制 神石山航空灯台設置
1948	23	青陵中学校開校
1950	25	豊岡中学校開校 市営多米住宅建設 多米青年団発足 多米校区子供会発足
1952	27	豊橋養老院開設
1953	28	台風13号襲来 東部保育園開園 児童福祉施設岩崎学園開園 市営住宅新多米住宅建設
1955	30	多米町子供会 野球大会優勝
1956	31	多米小学校校歌制定
1959	34	伊勢湾台風襲来
1960	35	市電延長 赤岩口まで
1961	36	豊川用水東部新幹線用地買収開始 市内循環バス岩崎線開通
1962	37	葦毛森林火災 二川まで延焼
1963	38	多米公民館落成式 東三河工業整備特別地指定
1964	39	東京五輪・東海道新幹線 上水道拡張 多米も給水区域
1965	40	多米峠有料道路起工式 多米・知波田小学校交歓会 仔羊幼稚園 八町から移転
1966	41	多米峠有料道路開通 集中豪雨の被害 10/12
1967	42	葦毛湿原枕木遊歩道設置
1968	43	豊川用水全面通水
1969	44	豊橋東部農協同組合設立 多米土地区画整理組合発足

1969	昭和44	豊橋自然歩道推進協議会発足 石巻山多米県立自然公園指定
1970	45	朝倉川改修着工
1971	46	台風23号 風水害 東三河環状線 都市計画決定 高山学園移転
1972	47	朝倉川改修完了 1級河川昇格 柳原住宅建設開始 2棟
1973	48	下水道工事開始 市営柳原住宅入居開始
1974	49	多米小プール竣工 七夕豪雨 校区大被害
1975	50	530運動推進連絡協議会 多米小学校新校舎起工式
1976	51	新校舎竣工式 大移転 岩崎町 多米校区へ編入 ゆめの子幼稚園開園
1977	52	開校百周年記念式典挙行 NHK中継所共同中継局開局 柳原住宅4棟 計19棟完成
1978	53	豊橋市民俗資料収蔵室開館
1980	55	多米診療所開院 内科小児科 多米校区市民館 開館
1981	56	第1回校区体育祭 校区親睦旅行実施
1983	58	新町名に変更 10/1
1984	59	多米区画整理記念館
1985	60	多米区画整理事業完了
1987	62	多米峠有料道路無料開放 葦毛湿原 市天然記念物
1988	63	東陽中学校開校 東陽地区市民館開館
1992	平成4	市体育大会綱引優勝(13連勝へ) 葦毛湿原 県天然記念物指定
2004	16	環状線トンネル開削決定 東陽いきいきクラブ設立
2006	18	豊橋市市制百周年

編 集 後 記

豊橋市には51の校区がある。

今回、市制施行百周年を記念して、各校区がそれぞれ『校区のあゆみ』を編集することになった。

私たちは、この小さな『校区のあゆみ』を小中学生のために編集することにした。

なぜなら、この子たちは、これからの多米を一番長く生きていく存在であり、校区の大事な宝でもあるからである。

校区は、子どもたちが最初に意識する社会であり、やがてはふるさとになっていく。

ここに一つの詩があった。(中島和子)

ふるさとは なんにもない
山と 川と 空のほかには
だけど 母さんがいる

ふるさとは なんでもある
夢と 友と 思い出がある
だけど 母さんがいない

ふるさとは何もないが、何でもあるという一見矛盾したこの一言に強くひかれるのはなぜだろうか。

多米の子たちにとって、多米校区はまさにふるさとである。大人になった時、きっと思い出してもどってくる心のふるさとである。

そんな多米の子たちに、多米の思い出となるように、いろいろなことをまとめて伝えていきたいと強く思っている。

多米校区史編集委員会

編集委員

萩本 和夫 (校区総代)
山本 忠義 (多米中町)
大川 一作 (多米西町)

中神 孝夫 (多米東町三丁目)
木和田治伸 (多米中町)
藤升 信次 (岩崎町)

中神 孝夫 (多米東町一丁目)
萩本 匡史 (多米西町)
加藤 明男 (岩崎町)

校区のあゆみ 多米

平成18年12月25日発行

編 集 多米校区総代会
多米校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会
印 刷 株式会社 きょうせい

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOY INK
Trademark of American Soybean Association



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋